

# 1章

## 【問題】(演習)

出典：酒井直樹『死産される日本語・日本人』／中央大学 法学部・法律学科 98年

### 文章略解

人種主義で上位にある者は、自らの人種主義性を顕示しない。こうした者は、排除される側の人間が人種の特异性に根ざす主体性を打ち出すと、人類主義の普遍性の立場から批判する。排除する側が持ち出す普遍主義は、自らの人種主義を隠蔽するための人類主義である。一方、排除される側が主体性を維持するための特殊主義は、排除する側の植民地主義の範疇を逆手に取る形で構制されるため、現状ではこの両者は相互依存―共犯関係にある。

### 解答

問 1 (1) 〓 感傷 (3) 〓 転嫁 (4) 〓 弾劾 (14) 〓 統治 (15) 〓 懐柔

問 2 (2) 〓 D (5) 〓 C (6) 〓 E (9) 〓 A

問 3 D 問 4 C

問 5 B・D 問 6 E

出典：外山滋比古『俳句的』／早稲田大学 第一文学部 00年

## 文章略解

近代俳句は反俗を標榜し、通俗的なものを排斥するあまり、私たちの日常の現実から遊離した言葉をもてあそぶようになり、そのことが俳句の生命を弱化したように思われる。芭蕉やワーズワースのような詩人は、詩としての新しさを通俗の中にこそ求めた。現在の短詩型文学に必要なのは、小さな「個性」や「自我」にこだわるのではなく、通俗の中に新しい詩を求めることではないか。

## 解答

問1 明治になりくうになる。(15～16行目)

問2 1 □ 2 □ 3 ニ 4 イ

問3 a へ b □ c ニ

問4 ニ

問5 田夫野人のことば(42行目) 問6 イ・ニ

出典：〔甲〕川田順造『聲・乙』川坂部恵『仮面の解釈学』／早稲田大学 法学部 91年

文章略解

〔甲〕名づける行為には、対象の「個」をいつくしむという側面と、逆に辱しめるといふ側面との二面性がある。この行為は分類・認知の体系の一環であり、その結果が対象の真偽によって二面的なあらわれ方をしたことになる。

〔乙〕固有名詞によってしか表し得ないとされる〈固有性〉も、結局は諸関係の網の目のひとつの結節点に過ぎない虚構のものである。この虚構性が暴露されるのを防ぐために、古来様々な禁止が固有名詞についてなされてきた。

解答

問1 (ウ) 問2 (エ)

問3 (1) 相対的な述語にパラフレーズする〔15字・43行目〕

一般的な差異と分類の体系のなかに登録し位置づける〔24字・56～57行目〕

(2) 正真の「個」〔9行目〕

問4 (ア) 問5 甲 乙

問6 「さいちくりんのけいさんぞく」と言う謎めいた個の表示機能を持つようだが、「西の竹藪の三足の鶏」と意味機能を解きあか

すとそのアイデンティティは失われてしまう。固有名詞のアイデンティティとは突き詰めればこのように実体のないものであり、その喪失を未然に防ぐために固有名詞には禁止がつきまとうことになる。〔149字・解答例〕

問1 「この両極性」に相当するのは、問題文甲の傍線部1以前の部分、つまりは第一段落と第二段落の内容である。このことは、第二段落の冒頭が「だが反面」で始まっていることから容易に看取できる。双方の段落から「両極的」になるような内容を抽出してみると「いつくしんだり抱きしめたりする」(2行目)と「犯し、辱しめる」(4行目)となる。この両方を押さえていない(イ)・(エ)はまずカットできる。残った三者のうち、(ア)は「名がその人にふさわしくないとき」という記述がこの部分の表現に相当しないので誤り。(オ)については、「身分が高い」「身分が低い」を問題にしているのが第二段落だけであり、したがって「身分の低いものをいつくしんだり」という記述が問題文甲にそぐわない。残るのは(ウ)のみ。「不用意に」という選択肢の表現は「みだりに」(4行目)にほぼ相当している。

問2 設問の指示にある「化け物退散の話を分析することで文・甲の筆者が述べている」ことが集約されているのは、24行目からの段落である。この分析の要点は傍線部2の「(固有名詞の装いを剥奪してそれを)普通名詞に還元してみせる」ということだろう。だとすれば(エ)の末尾にある「固有名詞の固有性そのものを暴きだした」はこれと全く逆である。(ア)の「じつは……普通名詞に名前を装いを与えたものにすぎず」・(イ)の「普通名詞的意味機能が……判ってしまう」・(ウ)の「固有名詞の普通名詞への還元」・(オ)の「固有名詞は……普通名詞的側面も隠し持っている」はいずれも傍線部2の内容に相当している。

問3 (1)について。傍線部2の内容に関しては、問2で検討したとおり、「固有名詞」のもつ「固有」性の剥奪、ということである。したがって、解答にあたっては、問題文乙の中から「固有名詞」に関して「固有性」のないものとして捉えている部分を探していけばいい。問題文乙の筆者は、まず固有名詞を〈名前〉ではなく〈記述〉として位置づけている(37～39行目)。この〈記述〉の本質を言い表したものが「述語としてパラフレーズされる」ということである。この部分と同じ意味で、しかも傍線部2の「してみせる」という言い方に相当する能動性を持った部分が「相対的な述語にパラフレーズする」(43行目)。これも〈記述〉を区別する説明として使われている。また、この最終段落においても坂部は〈固有〉名詞を否定し、「分類語」という本性を指摘している。この「分類語」の本性を表す行為を述べた部分を字数指定に従って抜き出すと「一般的な差異と分類の体系のなかに登録し位置づける」(56～57行目)となる。

(2)について。この〈名前〉という表現は、さきに(1)でも検討したように、38行目で「『個体』を直接に指示」するものとして坂部の用いたものである。したがって、解く側の作業としてはこの「個体」に相当する表現を問題文甲の中から探し出すことが必要になる。これは問題文甲の末尾「『個』を指示するものとしての固有名詞」に着目できれば比較的簡単だろう。要は「個」を指示するものなのだ。ただし設問の指示が「語句」（つまりは複数の単語）なので、「個」という語を含んで「語句」としてのまとまりを持っている部分（9行目）を範解としてとった。

#### 問4

傍線部4は、直後で「〈固有名詞〉と〈指示代名詞〉の短絡」と言い換えられている。したがってここでは〈意味する行為〉とする名詞Ⅱ〈固有名詞〉、〈指示する行為〉をする名詞Ⅱ〈指示代名詞〉、と考えておいていい。一方、選択肢を見るといずれも「差異の体系の結節点にほかならない個体……行為のための道具として、固有名詞を用いること」という形になっている。解く側としては、こういう共通項は除外して、選択肢群の残りの〈差異の体系〉を見ていけばいい。実際、さほど難しい作業ではない。

(ア)・(エ)は「指示する行為」と述べ、(イ)・(ウ)・(オ)は「位置づける行為」と述べている。これだけで(イ)・(ウ)・(オ)はカットできるだろう。この部分で筆者が問題にしているのは〈指示する行為〉と「固有名詞」をつなげてしまうことなのであり、「位置づける」という行為に關しての言及は最終段落になってからである（しかも、この「位置づける」という行為は〈固有〉名詞とは区別された「分類語」について述べられているものである）。

(ア)と(エ)の見極めも比較的簡単だろう。(ア)は「相関の意味を指示する」と述べ、対して(エ)は「相関の意味とはまったく独立に指示する」と述べている。指示代名詞の機能は「他の諸項との関係においてはじめて意味を受け取る（42〜43行目）ことだ。これを「相関の意味」と言わずして何であろう。(エ)の「相関の意味とはまったく独立に指示する」のはラッセルの定義する絶対的記号としての〈名前〉の機能だ。

#### 問5

問題文甲の筆者Ⅱ川田と、問題文乙の筆者Ⅱ坂部との立場の違いは、川田が「正真の『個』」なるものの存在を前提としている（問3の(2)についての解説部分参照）のに対し、坂部はそもそもそれが存在するかどうかを疑っている（44行目）点に求められよう。

選択肢群の中で「正真の『個』」（Ⅱ「かけがえのない個」）の存在を前提としているのは(ア)・(イ)・(ウ)である。このうち川田の言うところの「両極性」をきちんと押さえているのは(ウ)であろう。「個とみなされているものが虚妄である場合」の例が「怪物退散」

の話に、「個が真正である場合」の例が「難題聳」の話に相当する。(ア)はこのうち後者についての説明に「心はなっているが、「人間が生きてゆくための最も本質的な営為」に相当する部分が問題文甲の中に求められない。(イ)に関しては「述語として記述される」「指示機能のみを働かせる」という表現は問題文乙のものである(しかしながら、「かけがえのない個」の存在を認めている点で、坂部の立場とも異なっている)。

一方、(エ)・(オ)・(カ)の吟味であるが、「かけがえのない個」の存在を明確に否定している(カ)が坂部の立場には最も近いであろう。(エ)については「ある種の結婚」が問題文甲に挙げられている例であるのもさることながら、「網の目自体を変えてゆく可能性を持つ」としている点が坂部の立場と異なっている(このことは川田も言及していない)。社会変革への期待は坂部の(この点では川田も基本的には同じだが)文章の中には含まれていないことを読み取るべきだろう。文章を読みながら読者が「網の目を変える」必要性を思うのは勝手だが、そんなことを設問は要求してはいないのだ。同様に、(オ)も「乗り越えなければならぬ」としている点が坂部のモチーフとずれている。「社会の下限でたわむれる欲望や情念をとらえよう」という言い方も51〜52行目の内容を短絡的に捉えてしまっている。

## 問6

傍線部5の「〈固有性〉」とか「〈親密性〉」とか「〈主体〉」とか「〈人格〉」とかいった幻想的な領域を聖なるものとして確保する」に相当する内容を具体例に即して述べている部分を問題文甲の中に探していくと、「化け物問答」の中の「自分の謎めいたアイデンティティを保」つ(28行目)ということになる。あとはそのための「複雑なからくり」をこの例に即して説明していけばいい。

百〜百五十という字数制限はひとつの文で書き切るには長いから、以下のように二つに分けてみることを考えよう。

- ① 「化け物問答」の具体例↓固有名詞的なもののアイデンティティの喪失
- ② ①を防ぐための「固有名詞の禁止」

①は問題文甲に即して「さいちくりんのけいさんぞく」「なんちのりぎよ」「ほくざんびゃっこ」「とうざんばこつ」のうちのひとつを使って説明すればいい(字数制限に幅があるのは、これらの具体例に長さの幅があるからだろう)。②に関して注意してもらいたいのは、この傍線部5が「固有名詞の禁止とは」という主語を受けている部分であるということだ。したがって①の説明を「固有名詞の禁止」につなげるように書いていく必要がある。解答例ではこの①と②との間に「実体のないもの」という中間項を置いてみた。こうすることで「幻想的」「聖なるもの」の実態がよりクリアーに見えてこよう。

出典：塚谷裕一 『三島由紀夫と松の木の逸話』 / 立教大学 社会学部 92年・一部改

## 文章略解

三島由紀夫は植物に疎かったという説に時々出会うが、本当なのであろうか。三島の作品に登場する植物の豊富な彩りに触れると、そうは思えない。その三島の植物、ひいては自然の描写の仕方は、日本の正統的な自然描写がコード化された記号に対するそれに傾きがちなのに比して、非常に異端である。古の文人の伝統的な感覚をなぞるだけの描写は決してせず、自身の新鮮な驚きをもってそれぞれの事物を見、それと作品中での役割を考え併せて表現しているのである。

## 解答

問1 ① 疎 ② 二つら ③ 縫 ④ やゆ ⑤ 縛 ⑥ 故事来歴 ⑦ 採用

問2 目をおどろかすもの〔9字・解答例〕

問3 ① 桜はマゝった。〔22～23行目〕 ② ①

問4 伝統的な自然描写に縛られることなく、自身の新鮮な驚きをもって対象を見つめること。〔40字・解答例〕

問5 (1) ① (2) ②

問2 設問に「引用文の部分から抜き出し」とあるので、直前の引用文から空欄を含む文の類似表現を求めていくと、「すでに五日目、六回目の訪れであるから、目をおどろかすものは何もない筈なのに……」（42行目）という部分がある。「五日目、六回目の訪れ」＝「繰り返し……登場」・「何もない筈なのに」＝「何もなかった」という対応を考えれば、「目をおどろかすもの」が簡単に指摘できる。

問3 ①＝「正統的な自然描写のしかた」についての説明は、次の行の「日本の花鳥風月……その典型を見ることができ」（33～35行目）の部分でおこなわれている。つまり従来の方法とは、花鳥風月を実物としてではなく、伝統に縛られた単なる約束事、コード化された記号として捉えることである。このことについての具体例を探せばよい。「一文」という単位の指示もヒントになる。②の設問の文言に「そのような和歌の伝統的な……」とあるところに着目できれば、和歌について述べている部分に当たりが付けられるはずだ。

②＝和歌の伝統的な「自然描写のしかた」、つまり花鳥風月を伝統に縛られた約束事として見る態度は、「歌枕」のそれと同じ。歌枕とは、歌に詠み込まれる名所が、多くの歌人に詠み継がれていく間に、特定の情緒をもって連想されるようになった地名のこと。「吉野」といえば桜、「飛鳥川」といえば人の世の無常、というように固定化された景物や情緒などを連想させる。

問4 前の問3で答えた内容を裏返して説明を書くことを心がければいい。記述にあたってまず必要なポイントは、①伝統に縛られた約束事として見ない、という旨の指摘である。ただし、このようなネガティブな記述だけでは解答として不十分。それに加えて、三島由紀夫独自の見方の内容についての説明がほしい。これについては、38～40行目の「三島はこれとは反対に……」の一文の内容をくみとって②新鮮な驚きをもって事物を見る、という旨の指摘があればいい。

問5 単純な文学史の知識問題。選択肢を見ると全て作品名なので、西行と秋成の作品をそれぞれ選ばばよい。いずれも著名な作品である。

## 2章

### 【問題】(演習)

出典：桑子敏雄『環境の哲学』〈第8章空間を貧しくするもの〉の一節／早稲田大学 法学部 01年

#### 文章略解

開発計画に対して自然保護を訴える論理は、空間の価値を言葉によって表す「空間の概念化」を前提とする。それは同時にある価値概念の妥当する空間を囲い込むことにもなる。ハードゾーニングがほどこされたテーマパークでは、多様であるべき空間の経験が、一定の概念によって限定されてしまう危険性がある。本来は自然にゾーニングは存在するものではない。その意味で「自然との共生」と「空間の概念化」は相矛盾するものである。

#### 解答

問1 X⇨オ Y⇨ケ 問2 ウ 問3 エ

問4 自然にはゾーニングは存在しない (15字・73行目)

問5 ウ 問6 ア

問7 ⑤ 問8 ウ・キ

出典：今福龍太『遠い挿話』／上智大学 法学部 03年

## 文章略解

イギリスの批評家ポール・フェッセルは、旅人を「探検家」「トラヴェラー」「ツーリスト」に類別している。危険を冒して未知の世界から発見を持ち帰る「探検家」、商業主義的な旅の途上で既知の知識を確認する「ツーリスト」、そして異国趣味と冒険をロマンティックに味わう「トラヴェラー」である。こうした西洋的旅人の「旅」は、ヨーロッパという始点と終点を想し、「家」と「外国」、「自己」と「他者」を区別することで成り立つ西洋的アイデンティティの実践であった。しかし現代の「旅」は、もはやエキゾチックな発見の対象としての「辺境」も、帰るべき中心としての「故郷」も失い、安定したアイデンティティの実践ではなくなりつつある。

## 解答

問1 4 問2 3 問3 3 問4 2

問5 1 問6 3 問7 4

問8 1 ≡ A 2 ≡ B 3 ≡ B 4 ≡ A 5 ≡ A

出典：多木浩二『エアポート・ロビー』／日本女子大学 家政学部 98年

## 文章略解

私が一番好きな空間は、巨大な空港のロビーである。それは人間の移動するスケールを超えており、多系の機能で構成された空間ではあるが、その空間を共有する人々の間には心的な関係はない。空港ロビーはどんな意味を仮託しても意味をなさない空間である。こうした性質は、たいいていの公共的な場所、ひいては都市という存在の根源に通じるものである。いわば巨大なヴォイドであり、人々が地球規模の時空間を経験する端緒なのである。

## 解答

問1 その機能はくればいい。(28～30行目)

問2 1

問3 人間同士のなんらかの心的な関係〔15字・解答例〕

問4 5

問5 巨大なヴォイド〔25行目ほか〕

## 解説

問1 設問の指示に従って、この傍線部分より後に「機能」について説明のある部分を探していくと簡単に解答に至れる。そもそも、

ここ以後に「機能」という語が問題文中に登場する部分は、「その機能は……」（28行目以下）と、「機能だけは……」（37行目以下）の二カ所のみである。この両者を見比べてみれば、どちらがより「具体的」であるかは一目瞭然であろう。解答はこの全文体を抜き出したが、設問の指示はあくまでも「具体的に述べた箇所」である。「ただ人の……」以下を抜き出しても許容解である可能性は高い。

なお、ここで気を付けてもらいたいのは、「具体的に述べる」ということと「具体例を挙げる」ということとは必ずしもイコールではないということだ。「具体的に述べる」というのは「その場の個別の事情に即して述べる」という程度の意味である。ここで言うなら、傍線部分に言う「それらの機能」、すなわち「この空間」（IIエアポート）のもつ「多系の機能」（9行目）がどのように「構成され」ているのかを述べた部分、ということである。具体例を挙げた部分ならば第四段落（20行目以下）に数多く求めることができ、最適な部分を絞り込むのに苦労してしまう。それらをまとめた部分が、ここで出題者の要求する「具体的に述べた部分」なのだ。つまり、「人の通過をできるだけスムーズにし……表示を確実にす」というのが、ここで言う「多系の機能」を「構成」させること具体相なのである。

問2 「合致しないもの」という設問の指示に注意。その上で、ここで筆者の言う「たいていの公共的な場所」の性質を吟味していく。

1の「関心を共有する」以外の選択肢に相当する内容は、すべて問題文中にある。2の「見知らぬ者たちがただすれ違うだけ」は20～22行目に、3の「特定の世界を表象する形式になりえない」は28行目に、5の「どんな意味をそこに仮託しても意味をなさない」は11行目に、それぞれ相当している。この傍線部分を含む段落が「こんな話をしてきたのには」（31行目）と始まっていることからわかるように、これ以前に出されていた「空港」の具体例は「公共的な場所」の一例として挙げられていたのである。4の「共同体という幻想を無化してしまう」に相当する記述はここ以前には求めにくいだが、傍線部分に続く記述で「共同体という幻想」（38～39行目）について「無意味」であるとし、さらに「もはや都市が意味をもつという幻想さえ棄てたほうがいい」（42行目）と述べている部分の趣旨に合う。しかしながら、1の「関心を共有する」というのはこれらとは正反対の方向性である。したがってこれを解答として選ぶのが適切であろう。

問3 傍線部分の「それは」が「地理的な隣接関係とは異なる」の主語になっていることから考えたい。ここでこの「それ」は「地理

「的な隣接関係」と並べられているものであるから、他の「関係」に相当するものであると推測するのが妥当である。そう考えた上で、この傍線部分より以前に「関係」に相当する内容を求めていくと、「人間同士がなんらかの心的な関係をもつ……」（37行目）という記述に至る。ここの部分を使って、「関係」を軸にした名詞句としてまとめれば出題者の要求は満たせよう。

**問4** **問2・問3**で見てきたように、筆者が空港を例として挙げているモチーフは、「人間同士のなんらかの心的な関係」やら「関心」やらを共有することがない（意味を無化する）ということを核とするものである。この、人間関係の稀薄さをきちんと捉えた選択肢は5。1は「身の安全は保証されていない」の部分が不適切。2は問題文第一段落の記述を踏まえてはいるが、この「人間関係」を核にしていない点で5には劣る。3については、「スケールの大きさ」を「空港」の魅力として挙げている記述が問題文中に求められない。4の前半は合っているが、後半の「通過する際にひっかかると厄介なことになる」は11〜12行目の記述では魅力として述べられていないのでやはり不適切。

**問5** 抜き書きの問題では、設問の表現から、出題者の要求を具体的に読み抜いていくことが課題となる。「端的に表現していることば」という微妙な指示に注意。出題者の求めている解答は、①「主体」「他者」「権力」といったさまざまな場面において、②「ゼロ」に近い意味を持った語……ということになる。②だけにあてはまる語ならばいくつもあり得るが、①②が「端的なことば」として連続している部分は「巨大なヴォイド」しか求めにくい。「巨大な」が①に、「ヴォイド」が②に、それぞれ相当している。

出典：竹田青嗣『現代批評の遠近法』／オリジナル問題

## 文章略解

芸術作品が与える感動は、作品と私たちとの間に深い謎を生むことで、私たちの自己同一性を内部から揺り動かし、世界に対する感受性がすでに今までとは違ったものに変容してしまったことを指し示してくれる。私たちは世界や他者との関係の根本において、このように自己を深く突き動かし、自我のありようを根底から編み変えてくれる美やエロスを求めているのだと、私は陽水の響きを通して了解したのであった。

## 解答

問1 ホ 問2 ニ 問3 最初〓〈私〉がす 最後〓であること〔18～19行目〕

問4 〇 問5 ハ

## 解説

問1 「他人の視線による不安は〈私はこういう私である〉という自己意識を脅かす」(18行目)とある。この〈私はこういう私である〉というのが、傍線部の「自己同一性」であって、状況に応じて、表面的には様々なありようをする私の根本にある、変わらない〈私〉——本当にそういう〈私〉なるものが存在するかどうかはとにかくとして——のことである。だが、この「自己同一性」は本人がそう信じているだけで、他人の目にも自分がそのようなものとして映っているかどうかの保証はない。自分が〈自分〉を、距離をおいて眺めることは難しいが、他人は〈自分〉に距離をおいて、〈自分〉を「対象化」して眺めることができる。そのとき、他人の視線は自分が信じている自己のイメージ(自己同一性)を否定するのではないか。——これが傍線部の意味。ホが正解。

イ「それまで自分に抱いていた自信」が誤り。正しくは、「それまで抱いていた自己のイメージ（自己像）」であって、自分に対して自信を抱くか否かは無関係。ロ「それまでの自分」が「独善的な自分」であったか否かは無関係。ハ後半は傍線部の意味と無関係。ニ「自分の従来の〈自我〉を編み変える必要」は、「自己同一性を脅かされる」結果として生じるもので、傍線部そのものの意味ではない。

問2 傍線部の直後に、「この謎は……発見からやってくる」とあり、この中の「見慣れない感情」とは、〈ある芸術作品に接して生じ

る、これまで自分が経験したことがない感情〉のことである（言うまでもないが、「感情」は「感情」の一つである）。そして、この〈これまで自分が経験したことがない見慣れぬ感情〉が自分のうちに生じたことの発見が、「その〴〵作品」と自分自身についての深い謎を置くことになるのであるから、正解は二。なお、二の「まるで自分が変わってしまったように思える」は、「すでに〈私〉の自己同一性が解体され変容していることを」（16〜17行目）と、「〈私〉がすでに……いままでとは違った感受性としてあることを」（18〜19行目）の箇所から、また、「未知の感情」は「ある見慣れない感情」（13行目）の箇所から、それぞれ正しい内容と判断できる。

イ「謎」を「芸術作品の〈世界〉に対する」ものとしたのは誤り。ロ全体が傍線部とかみ合わない内容だが、特に、「自己同一性の破綻」としたことが誤りの源となっている。ハ「自分自身についての深い謎」の説明としてぜひ必要な、「ある見慣れない感情が生じた」に当たる内容を欠いている。ホ「外側から」であれ、「内面から」であれ、芸術上の感情は〈私〉を「規定」するものではない（14〜16行目）。

問3 傍線部は、「この謎は……発見からやってくる」の一文にあるのだから、「この謎」と深い関わりがある。したがって、「謎」に

ついでの説明箇所が答えの候補になるはずというのが第一の着眼点。また、答えとなる箇所には、傍線部の核となっている「見慣れない感情」と同一の内容が含まれていなければならないというのが第二の着眼点。第一の着眼点からすると、14〜16行目の後半、16〜17行目、18〜19行目の後半、33〜34行目が候補となるが、この中で第二の着眼点の要求を満たすのは18〜19行目後半だけ（「見慣れない感情」イコール「いままでとは違った感受性」）。

#### 問4

傍線部は、「美やエロスを深く味わ」ついているときの状態だが、30～32行目によると、人間関係が閉じることで、自分が動かされたり打たれたりすることがなくなるのが苦しいために、常に他人との関係を新しいものに変え続けようとするところにも、美やエロスを深く味わおうとすることの中にあるのと同じ「事態」が潜んでいるのである。

ところで、第三段落によれば、われわれは美に接し、エロスを深く味わっているときには「すでに〈私〉の自己同一性が解体され変容している」のである。そして、この傍線を引いた箇所と、先の「常に他人との関係を新しいものに変え続けようとする」の箇所を重ねてみてもらいたい。一方は〈私〉の感受性に関わり、他方は「他人との関係」に関わるという違いがありながら、ともに「同一性の解体・変容」という点で本質的に同じであることがわかるはずで、これが、第七段落第四文がいう「全く同じ事態」(30行目)なのである。以上の読解から答えは□となる。

イ「不安に陥っている」が誤り。ハ本文からすると「〈ほんとう〉の美」とされるものはないはず。ニ美やエロスを「生が目指すもの」としたのは誤り。ホ「美やエロス」は、「わたしたちが」求め、深く味わうものであって、自分との「関係」としてあるものではない。

#### 問5

内容判定(趣旨判定) 問題は必ず根拠を本文中に求めること。先入観に左右されると失敗する。イ9～11行目、14～17行目と合致。□30～32行目と合致。ハ「効用」とはある目的のための使い道、ききめの意味だが、「美」が「効用」をもっていると解される記述は本文に全くない。本文に述べられていることからすると、「美」は感銘を与えるという形で、〈私〉の自己同一性の解体、変容を生じさせるものである。また、「感銘が外側から」も誤り。外側から自己同一性を解体させるのは他人の視線である。ニ6～7行目と、18～19行目と合致。ホ25～27行目、28行目と合致。

出典：『大鏡』(第五 道長・上)の二節(一部省略あり) / 青山学院大学 文学部 97年

## 現代語訳

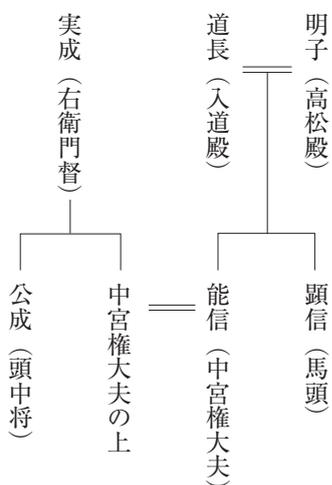
(道長さまのお子さまがたのうち) もう一人は、馬の頭で、(名を) 顕信と(呼ばれ) ていらつしやうた。御幼名は、苔君である。寛弘九年壬子正月十九日に、出家なさって、この十年あまりは、仏のようにして仏道修行をあそばす。(あのように家柄にめぐまれた方の出家とは) 意外にも、しみじみと感慨深いことである。

(顕信さまの実母にあたる) 高松殿が夢(の中)で、(顕信さまの) 左の方の御髪を、中程からお剃り落としあそばすと(いう夢を) 御覧になったのだが、こうして(顕信さまが出家なさった) 後に、この(顕信さまの出家の) ことが(夢に) 見えたのだなあと思ひあたって、「(夢解きに言つてその夢を) 変えさせたり、祈禱などをしたりすればよかつたものを」とおっしゃうた。

(顕信さまが) 皮堂で御剃髪あそばして、そのままその夜、比叡山へお登りあそばした(ときに)、「賀茂川を渡つたときの、(水が) たいへん冷たく思われたことが、少し悲しいことであつた。今はこのよう(に僧として川は歩いて渡るの) で当然な身の上であるのだなあとと思うものの」とおっしゃうた。現在の右衛門督(「藤原実成」)が、早くから、この顕信さまを「出家の相がおありになることよ」とおっしゃうて、(今では、顕信さまの弟である) 中宮権大夫殿の奥方さま(になつてゐる実成さまの姫君)に(顕信さまが求愛の) お手紙を差し上げなさつたけれども、(実成さまは)「そのような(出家の) 相がある人をどうして(我が家の婿にできようか)」とおっしゃうて、後でこの大夫殿(「藤原能信」)を(婿に) 取り申し上げなさつてゐるのである。(さて、寛弘九年) 正月に、宮中から御退出になつた際、この右衛門督が、「馬の頭(顕信どの)が、牛車の覗き窓から(顔を) 差し出したところ(を見たが)、ひどく出家の相は(時期が) 切迫してゐると見えた。(年は) いくつなのか」とおっしゃうたので、頭中将(「藤原公成」)が「十九才におなりになつてゐるでしょう」と申し上げなさると、「それでは、今年こそ(出家を) なさるだらう」と(いうお言葉が) あつたが、このように(顕

信さまが出家なさった」と聞いて、(右衛門督は)「予想どおりだった」とおっしゃった。人相見ではないけれども、身分教養のある人は、物事を予知することがおできになるものである。

入道さま(「藤原道長」は、「悔やんでも)むだなことだ。ひどく嘆いて(いるようには、顕信に)聞かれないようにしましょう。(人々の悲嘆のために)自然と道心が乱れるようなものも、顕信のために気の毒だ。法師になった子が(これまで)なかったのだから、(今さら)顕信の出家をよいことと考えてやらないのでは)どうしようもないことだ。幼いころにも(出家させて法師に)しようと思ったのだが、(本人が)いやがったから(見合わせたの)であった」と(言っ)て、ただしきたりどおりの作法(による出家者)のようにお取扱い申し上げなされた。(そうはいうものの)受戒(「仏門に入り得度した者が戒壇に上り、戒律を受ける儀式)には、すぐさま道長さまが(比叡山に)お登りあそばし、人々が我も我もと、お供に参上なさって、たいそう立派で美しかった。



解答

問1 顕信の出家

問2 (b) || イ

(c) || イ

(d) || イ

(e) || エ

問3 相人な

問4 ウ

問5 エ

問6 ア

問7 法師子

問8 オ

問9 ウ

問10 エ

出典：『無名草子』／ 聖心女子大学 文学部 98年

## 現代語訳

「この世に、(なんとまあ) どうしてこんな(よい) ことがあったものだろう」と、素晴らしいことに思わずにいられないのは、手紙でございますわ。『枕草子』に繰り返し繰り返して述べてございますようですから、今さら改めて(私などから) 申しあげるまでもありませんけれど、それでもやっぱりたいそう素晴らしいものです。遙かに遠い地方に離れ暮らして、何年も会わない人であっても、(その人のくれた) 手紙というものさえ読んでしまっただけで、現に今、目の前に向かい合っている気持ちがいましてね。なまじっか、直接に顔を合わせては思っている(強さの) ほどにも(かえって) 言い尽くしきれない心の微妙な趣きも(手紙の中では) 書き表し、言い伝えたいこともこまやかに書き尽くしてある(手紙) を読む(ときの) 気持ちは、他にないほど嬉しくって、互いに面と向かい合っ(話して) いるのに劣っているでしょうか、(いいえ、劣ってなどいません)。

手持ち無沙汰なときに、かつての(馴染みの) 人の手紙を見つけ出したときは、ただもうその(手紙をもらった) ときの気持ち(に戻るような気) がして、たいそう嬉しく思わずにはいられません。まして亡くなった人などが書いておいたものを読むのは、(なおさら) たいそうしみじみと心にしみて、長い年月が過ぎていくというのに、たった今(墨に) 筆を濡らして書いたばかりのような(感じがする) のは、何遍繰り返して(読んで) も結構なものです。(人の交わりというものは) 何につけても単に向かい合っている間の気持ちの通い合いだけ(のこと) でございますが、こ(の手紙というものは)、ひたすら昔のままでも少しも変わることがないのも、なんとも素晴らしいことです。

「たいそうよい時代であったという、(醍醐天皇の) 延喜年間・(村上天皇の) 天曆年間の御治世の故事も、中国やインドといった見知らぬ世界の出来事も、(もしも) この文字というものがなかったとしたら(判らなかつただろうし、ましてや)、今の時代の私たちの(生活の) 一部分(にして) も、どうして書き伝えることができただろうか、(いいえ、できなかつたことだろう)」などと思うにつけても、やはりこ(の文字で書かれる手紙) ほど素晴らしいものはまさかございませんまいよ。

## 訳注

原文は女房たちの会話の一部分、つまり「語り」として書かれた文章である。(文学史的背景を各自『便覧』などの資料で確認しておくとうい。)ここで、古文と現代文との敬語の種類による頻度の違いに関して言えば、一般に古文は現代語に比べて《尊敬語》・《謙讓語》が多く《丁寧語》が少ない。そこで、明らかに会話文と解る場合には現代語訳に関して丁寧語を補うことも許される。

右の見地から、現代語訳に際しては、文末を中心として適宜「です・ます」を補った。ただし、このような丁寧語部分に関しては煩雑を避けていちいち括弧書きで補入部を明示していない。そこで、これと区別するために、原文に丁寧語「侍り」が見られる箇所には訳語として「ございます」をあててある。

したがって、諸君が受験生として訳文を作成する場合には、右の訳文中の「です・ます」はなくとも構わないが、「ございます」としてある箇所は確実に丁寧語(「です・ます・ございます」)で訳する必要がある。

## 解答

問1 (A)〓ウ (B)〓イ

問2 ①〓なんとまあこんなにすばらしいことがあったことよ。〔解答例〕

どうしてこんなにすばらしいことがあったのだろうか。〔別解例〕

②〓劣ってなどいない。〔解答例〕 / 適わないことがあるのか、いやない。〔別解例〕

問3

品詞名	意味	終止形
助動詞	打消	ず

問4 イ

問5 (一)〓オ

(二)〓ましか

問6 時間と空間の大きな隔たりを越えて心情や出来事を伝えることができ、会話以上に表現力があるから。〔46字・解答例〕

出典：讃岐典侍（讃岐入道頭綱女・藤原長子）『讃岐典侍日記』（下巻）／ 白百合女子大学 文学部 98年

## 現代語訳

こうして、（陰暦）九月になった。九日（の重陽の日には）、お節句（の祝儀のお膳）を（鳥羽幼帝に）お給仕するなどして、中旬にもなった。

所在なくしている昼ごろ、（清涼殿の）暗部屋のほうを眺めると、（生前の先帝・堀河天皇が私に）お経をお教えくださると（おっしゃって、「私が）読んだ経文を、きれいに清書して（そなたに）やろう」と仰せあそばして、御勤行の折に、（清涼殿中の仏間の）二間で（のことだったが）、（わざわざ）立っておいであそばして、御清書あそばして、（私が）局に下がっていた間に、「典侍がまだ十分に憶えていない）お経を書いて、（それを人前に）持ち出したら笑われるだろう」とお思いあそばして、身に余るほどに（私を）大切にくださった御ことが思い出されてならないでいたときに、（鳥羽幼帝がそのお部屋の）御前においであそばして、「僕をだっこして、衝立の絵を見せて」と仰せあそばすので、（故院の追憶も）なにことも味気ない現実を引き戻される気持ちがあるが、（おっしゃるままに、帝のお食事の部屋である）朝餉（の間）の御衝立の絵を御覧に入れながら（ほかの衝立へと）歩き回っていると、（帝の御寢室である）夜御殿の壁に、（故院が）日夜目にしつづけて暗記しようとお思いになった楽曲を書いて貼り付けておいでになった笛の楽譜の貼られてあった痕跡が壁にあるのを見つけたのは、ぐっと胸が詰まる。（それでこんな歌ができた）

笛の音の……笛の音楽（の譜面）が貼り付けられた壁の跡を見ると、過ぎ去ってしまった（故院にかわいがっていたいただいたころの）ことはまるで（はかない）夢だったかのように感じずにはいられない（くて本当に悲しい）

悲しくて、（涙ぐんでしまうのを隠そうと）袖に顔を押しあてるのを、（鳥羽幼帝が私に抱かれたまま）いぶかしげに御覧になるので、（私が）「お気づかせ申しあげないようにしよう」と（思っ）て、なんでもないように振る舞いながら、「ついあくびが出てしまいました、こんなふう目に涙が浮かんできましたの」と申しあげると、（鳥羽幼帝が）「ぜんぶわかっていますよ」と仰せあそばすので、いじらしくも御勿体なくも（私が思わずにはいられないように）感じておいであそばす（ような）ので、「どのように御存じでおいであそばすのですか」とお尋ね申しあげると、「『ほ』の字や『り』の字（で名前が始まる僕の父上）のことを思い出しているみたいだね」と仰

せあそばすのは、(私が思いだしていたのがまさしく)堀河院の御ことだとちゃんとわかりでいらっしやるのだと思うのも、(幼い帝のことが)かわいらしくて、(亡き堀河院を偲ぶ)悲しみも薄れたような気持ちが出て思わず微笑みが浮かんでくる。  
こうして、九月も、とりたててこともなく過ぎていった。

**解答**

問1 (a) || ア (b) || ウ (c) || イ (d) || イ

問2 ウ

問3 思ひ出でらるるに、〔9字・4〜5行目〕

問4 (イ)

問5 ① || お見せ申しあげながら歩き回る ③ || 亡き堀河院を偲ぶ悲しみ

問6 鳥羽幼帝には、私が故堀河院を思い出して悲しんで泣いていることを、お気づかせ申しあげないようにしよう。

**解説**

問1 動作主体を問う問題。選択肢を眺めると、基本的な攻め方はすぐに立てられるだろう。すなわち、天皇二人と作者なのだから、尊敬語の有無という視点から、尊敬語があれば「天皇」、尊敬語がなければ「作者」ということになる。さらに二人の天皇については、過去の内容であれば既に亡くなっている「堀河天皇」、現在の内容であれば「鳥羽天皇」ということになる。この点に気がつけば、尊敬語のない(b)はウ「作者」とすぐにわかるはずである。

と、ここまででは簡単なのだが、この後に少々落とし穴がある。何気なく眺めていると、残るすべてに過去の助動詞がついていな

いのでイ「鳥羽天皇」としてしまいがちである。しかし、そうやってしまうと間違になる。問3がヒントになっているのだが、ポイントは傍線部(2)である。少し詳しく解説しよう。

(2)「見やれば」は、現在の作者の動作である。問題はこの後なのだが、普通は作者が暗部屋の方を見やったので、作者の目に映ったものが続くと考ええる。つまり、(2)「見やれば」の後も現在の内容が続いていると思つて読んでいくのが普通の読み方である。しかし、この場合、それではすぐに暗礁に乗り上げてしまう。次の「御経教へさせ給ふとて」は、尊敬語が使われている以上、この動作主体は「鳥羽天皇」と考えざるを得ないが、わずか六歳(当時の年齢は数え年だから、現代風に言えば五歳である)の幼児がお経を教えるなどということのあるはずがない。では、どう考えるのか。ここで気づきたいのが、4行目の「し給ひし御こと」という言い方である。ここに《過去》の助動詞「き」(の連体形「し」)が用いられていて、それが「御こと」という体言に係る連体修飾の働きをしている、しかもその「御こと」を「思ひ出でらるる」と続くことからすれば、この4行目までは過去を回想している部分だと考えないといけない(文法的に言えば、「御こと」に係る長大な連体修飾部ということになる)。つまり、「御経教へさせ給ふとて」から内容は過去のことになるということである。

右の点に気がつけば、(a)「仰せられて」は過去の内容ということになるので、動作主体はア「堀河天皇」と答えられるはずである。残る(c)・(d)は問題なく、現在の内容で尊敬語がついているので、イ「鳥羽天皇」である。

問2 古典常識(社会常識?)を問う設問。「長月」は九月だから、この日は「九月九日」である。この点さえ押さえられれば、九月

九日の節句(重陽の節句)なのだから答えは「菊」に決まっている。こういう設問では一瞬たりとも悩んではいけない。即座に答えられるように知識を確かなものにしておきたいものである。

ちなみに、エ「菖蒲」は五月五日である。

問3 問1で解説したとおり。「御経教へさせ給ふとて」から「かしづかせ給ひし」までは「御こと」に係る連体修飾部なので、文の

構造としては「見やれば、御ことは思ひ出でらるる」ということになる。したがって、「思ひ出でらるるに、」を抜き出して解答とする。

問4 識別問題。「る」の識別は基本事項なので、不安のある諸君は(他の識別とも合わせて)しっかり克服しておこう。入試では得点源とすべき分野である。

「る」の前の母音を見ると、「へ」↓「エ」である。ということは、この「る」は《自発・可能・受身・尊敬》の助動詞「る」の終止形ではなく、《存続・完了》の助動詞「り」の連体形ということになる。したがって、後は選択肢の中から《存続・完了》の助動詞「り」を選べばよいということになる。(ア)「たり」で一語(《存続・完了》の助動詞「たり」の連用形)。(イ)《存続・完了》の助動詞「る」の連用形。(ウ)「たる」で一語(《存続・完了》の助動詞「たり」の連体形)。(エ)「ぬる」で一語(《完了》の助動詞「ぬ」の連体形)。(オ)「るる」で一語(《自発》の助動詞「る」の連体形)。

#### 問5

① 品詞分解すると、「御覽せ・させ・歩く」である。「御覽せ」はサ変動詞「御覽ず」の未然形。「見る」の尊敬語である。「させ」は《使役》の助動詞「さす」の連用形。「歩く」はカ行四段動詞「歩く」の連体形。意味は「歩き回る・動き回る」である(必ずしも「歩く」に限定されない点がポイント。牛車や船を使ってもよい)。

以上をつなげると、「御覽にならせながら歩き回る」となる。これでは不自然なので、「お見せ申しあげながら歩き回る」として解答とする。

③ 「あはれ」は、しみじみとした感慨・情感をさす。しかし、この間でそれだけ書いても点数にはならない。ここで問われているのは、具体的にどのような感慨なのかという点である。

7行目あたりからの叙述に着目したい。ここでの作者は、壁に残った笛の跡を見て今は亡き堀河天皇のことを思い出して悲しみに浸っているのである。その感慨が「あはれ」の具体的な内容なのだから、解答では「亡き堀河院を偲ぶ悲しみ」などとする。(1)「亡き堀河院」(2)「悲しみ」の二点が指摘できていればよい。

#### 問6

まず波線部を品詞分解すると、「心得・させ・参らせ・じ」となる。「心得」はア行下二段動詞「心得」の未然形で、「理解する・悟る」の意。「させ」は尊敬の補助動詞を伴わない単独の用法なので《使役》(このあたりの説明があやふやな諸君は、「す・さす」の文法的意味の識別について直ちに復習しておくこと)。「参らせ」は《謙讓》の補助動詞「参らす」の未然形。「じ」は《打消推量》の助動詞「じ」の終止形。この場合は主語が一人称なので、《打消意志》となる。

以上をつなげて逐語訳を作ると、「お気づかせ申し上げないようにしよう」となる。後は、この逐語訳に「誰に何を」という要素を付け足してやればよい。

まず「誰に」だが、状況を考えれば容易にわかるだろう。ここは作者と鳥羽天皇の二人のやり取りが書かれている場面であり、かつ波線部は作者の心情なのだから、「誰に」に相当するのは残る「鳥羽天皇」である。少しややこしいのが「何を」の方なのだが、ここで作者が気づかれまいとしているのは、堀河院に対する感情である。本当は亡き堀河天皇のことを思い出して悲しみの涙を流していた（＝「悲しくて、袖を顔に押し当てる」）のに、鳥羽天皇には「あくびをせられて、かく目に涙の浮きたる（＝ついあくびが出てしましまして、こんなふう目に涙が浮かんできましたの）」と説明していることからすれば、「故堀河院のことを思い出して悲しみの涙を流していること」などとして答えとする。

## 現代語訳

(資通さんは)「もうおひとかたは(どなたですか)」などと尋ねてきて、世間(の男たち)にありがちなその場限りの好色めいた物の言い方などもせずに、世の中のしみじみと風情あることごとなどをあれこれと口にして、(その物言いが上品なので、初めてお会いするとはいえ)やはりどこまでも黙り込んだままではいられない雰囲気などもあって、私も同僚の女房も返事などすると、(資通さんは)「(こちらのお屋敷にも)まだ(私が)知らない人がいたのですねえ」などと(出仕しはじめたばかりの私を)珍しがって、すぐに立ち去りそうもない様子で、(その夜は)星の光さえも見えず暗いので、時雨が幾度も降り、木の葉に(雨が)かかる音も風情があるのを、「(こんなふうに時雨れて暗いのも)かえって優美で風流な夜ですな。月が曇りなく明るいような(何もかもは)っきり見えてしまふ夜というの)も、きまりが悪くて照れくさく感じてしまふさうだなあ」と(言っ)て、春や秋の(風情の優劣の)ことなどを語って、「時の移ろいにつれて見ていると、春の霞に情趣を感じて、(春と言えば)空ものどかに霞んで、月の顔もそれほど明るくもなく、遠く流れるように見えているところへ、琵琶の風香調(の調べ)をゆるやかに弾き鳴らしているのは、たいそうすばらしく聞こえるものですが、一方では、秋になって、月がたいそう明るくて、空は一面に霧がかかっているのだが、(月は近くに感じられて)手に取るほどはつきりと澄みきっている(晩)に、風の音や虫の声など、なにもかも(が情趣を催させる)というような気持ちになっているところへ、箏の琴がかき鳴らされている(音や)、横笛が吹きすまされている(音が響くようなときに)は、春なんかどうということはないと思われるものです。といって、そうかと思うと、冬の夜で空までも冴えわたって引き締まった風情があるときで、雪が降り積もり(月や星と)輝きかわしているときに、筆葉がふるえるように音を響かせているのなどは、春も秋もどちら(の風情)も忘れてしまふ(そ)うな情趣を感じ)ますよ」と言葉が続けて、「ど(の季節)にお気持ちを寄せますか」と(資通さんが)尋ねてくるので、(同僚の女房は)秋の夜に心惹かれるようにしてお答えになるのだが、(私は)そうとばかり同じようには言うまいと(思っ)て、

あさみどり……淡い緑(の若葉に)桜の花もいっしょになって霞んで、(その上にかか)つて)ぼおっと霞んで見える春の夜の月(の風情が思い出されます)

と答えたところ、(資通さんはその私の歌を) 繰り返し繰り返し口ずさんで、

「それでは、(あなたは) 秋の夜(の風情)はお見限りになったように聞こえますね。

今宵より……今夜から後の寿命がもしもあるならば、それでは春の夜を(あなたと出会った今夜を思い出すための) やすがと思いましょう。」

と言うので、秋に心惹かれ(ると先ほど答え) ていた同僚の女房が(詠んだ歌は)、

人はみな……あなたがたは二人とも春に心を寄せてしまったようですね。(ということはこれからは) 私ひとりが愛でることになるのでしょうか、秋の夜の月は

**解答**

問1 A⇨ア B⇨ウ C⇨オ

問2 ①⇨すぐには立ち去りそうもない様子で [解答例]

②⇨さまりが悪くて照れくさく感じてしまいそうだなあ [解答例]

問3 あら・未然形 問4 秋の夜に心を寄せて答へ給ふ [13字・本文11行目]

問5 E⇨イ F⇨ア G⇨ウ 問6 ウ

問7 春よりも秋が優り、さらに冬こそ最も趣深いと考えていたが、孝標女の春を愛でる歌に触れ、やはり春がよいと考えるようになった。〔60字・解答例〕

問1 現代語訳の問題は、まず単語の意味に忠実に逐語訳してみることである。傍線部に多義語が含まれている場合は、傍線部前後をざっと読解し、かつリード文や注、場合によっては設問自体もヒントにしつつ、多義語の意味を絞り込んでいくとよい。また、意訳に近い解釈を施す必要がある部分が問題となっている場合にも、やはり念のために傍線部前後を読解してから選択肢の検討に入ったほうがよい。

この問のような選択問題の場合は、傍線部を意味上のまとまりで区切ってから、選択肢の検討に入るという方法がある。傍線部Aはこの方法で、古文のどの部分に各選択肢のどの部分が対応しているのか、考えていくことにしよう。

傍線部Aは、意味上「うちつけの／けさうびてなども／言ひなさず」と区切ることができる。ポイントとなる語句は「けさう」。漢字でかくと「懸想」、すなわちラブ・アタックのことである。イウにはこの部分が訳出されていないし、エの「風流な物言い」という表現は「懸想びて」の解釈としては曖昧過ぎる。「懸想」にはもっと直接的なニュアンスがあるので、以上を消去し、アとオから絞っていくことになる。「うちつけの」は「突然の」。「うちつけなり」という形容動詞があり、「唐突だ・突然だ・露骨だ・軽率だ」などの意味がある。「言ひなす」は「それらしく言う・巧みに言う・あえて言う」などの意味があり、ここでは「言ひなさず」というのだから、「好色めいたものの言ひ方はせずに」という文意となる。オは「恋心を寄せている」の部分はよいが、「うちつけの」の解釈として「わざわざ」という表現はふさわしくないし、「言ひなさず」を「打ち明けず」と訳すのも飛躍がありすぎる。正解はア。「その場限りの」という表現は、「だしぬけである・なんの脈絡もなく突然に」というニュアンスを持つ「うちつけの」の解釈としては許容範囲である。なお、細かいことだが、傍線の「など」が訳出されている点からも正解はアと決まる。選択問題の場合の攻略法として、選択肢相互を見比べて、選択肢を二分（または三分）してから、傍線部との対応を考えるとよいものがある。傍線部Bはこの方法で取り組んでみよう。

冒頭が「あちら」となっているものと「こちら」となっているものにグループ分けできそうであるが、もう少し詳しく見ると、アは「(相手の)意見」、イは「(相手の)主張」、エは「(相手の意見) 同調」というように、共通項で括ることができる。わかる。

よって、アイエのグループとウオのグループに分けておく。

傍線部Bは意味上「さすがに／きびしう／引き入りがたき／ふしぶしありて」と区切ることができる。ポイントは「引き入りが

たき」の部分の主体と、その解釈にかかっている。

傍線部の直前の文意は

「世の常のうちつけのけさうびてなども言ひなさず↓世の中のははれなることどもなどこまやかに言ひ出でて」

という構造になっている。主体は資通である。「いま一人は」という言葉から窺われるように、内心は孝標女に対して好奇心がすぐられていることは疑いがないのだが、露骨に好色めいた言い方することなく、世の中のしみじみと風情あることなどを口にするという、上品な振る舞いをしている様子が描かれている。いわば、明確なテーマのない雑談をしているのであって、この場面に描かれているのはムード優先の語りである。よって、「(資通の)意見・主張」という強い語句が含まれるア・イ、それに準ずるエが除外でき、残るウとオで絞り込んでいくことになる。ウとオの主な相違点は、「引き入りがたき」の主体である。ウは「(こちらが)押し黙ってもいられないようなところがあって」、オは「(相手に)引つ込みのつかない思いをさせるわけにもいかずに」となっている。傍線部には使役の語はなく、またそのように解釈しなければならぬ必然性もないので、正解はウとなる。

傍線部Cについては、傍線部前後の文意を読解してから選択肢の検討に入ることにする。

5行目「時に従ひ見ることには」以下10行目「春秋もみな忘れぬかし」までは資通の発言で、傍線部Cはこの中にある。この発言の前に「春秋のことなど言ひて」とあるので、この発言は、春や秋の風情の優劣のことなどを語り出した導人に続けて、それぞれの季節の風情についての詳細を述べたものであることがわかる。この点を踏まえて、資通の発言をまとめると、

・「春霞おもしろく〜いといみじく聞こゆるに(春の風情のすばらしさについて)、また秋になりて〜横笛の吹き澄まされたるは(秋の風情のすばらしさについて) ↓なぞの春とおほゆかし」

・「また、さかと思へば〜筆築のわななき出でたるは(冬の風情のすばらしさについて) ↓春秋もみな忘れぬかし」

つまり資通の話は、

『春の賛美↓秋の賛美(=春の否定) ↓冬の賛美(=春秋の否定)』

と進んでいるのである(もちろん、「時に従ひ見ることには」という前置きがあるのであるから、「否定」といっても絶対的な評価ではなく、その季節になるとその季節のすばらしさに心を奪われてしまい、別の季節のすばらしさなど忘れてしまう、という程度の意味であるが)となれば、傍線部Cの意味するところはオということになる。「なぞの」は「何ぞの」ということで、「何の春ぞや」と同じ意味である。「どうして春がすばらしいということがあるうか、いや、それほどのことはない」ということである。ア

イウエは春の肯定となっており、文脈にそぐわない。

問2 傍線部①は「とみに／立つ／べく／も／あら／ぬ／ほど」と品詞分解される。「べく」の解釈がポイントである。「とみに」は、

多く打消語を伴って「すぐにはくはない」という意味になる。ここでは「あらぬ」の「ぬ」が打消語にあたる。助動詞「べし」は打消語を伴っている場合には《可能》の用法であることが多いが、ここをそのように取るとニュアンス的に強すぎ、前後の流れから見ても必然性がない。「(こちらのお屋敷にも) まだ(私が) 知らない人がいたのですねえ」という資通の言葉に続いているのであるから、「すぐには立ち去ることができない様子で」と解釈すると、孝標女に対する関心が露骨過ぎ、冒頭から描かれている資通像とも抵触するので、《推量》の意に取るほうが自然であろう。よって正解は「すぐには立ち去りそうもない様子で」とするのがよい。

傍線部②は「はしたなく／まばゆかり／ぬ／べかり／けり」と品詞分解される。「はしたなし」は「きまりが悪い」、「まばゆし」は「照れくさい」、「ぬべし」の「ぬ」は《確述(＝強意)》であるから「ぬべし」で「(いかにも) くしそうだ」となり、全体では「きまりが悪くて照れくさく感じてしまいたいそうだなあ」となる。月が曇りなく明るいような、何もかもはっきり見えてしまう夜についてこのように言ったもので、明晰よりも朦朧をよしとする王朝貴族の美意識の一端が窺われる発言である。

問3 「もしも」「ば」とあることから、ここは仮定表現であることがわかる。接続助詞「ば」は未然形を承けて仮定表現を作るのであるから、空欄には「あり」の未然形「あら」が入る。

問4 指示副詞「さ」を含む部分は「そうとばかり同じようには言うまいと思つて」という意味である。直後の歌には「春の夜の月」が詠み込まれており、春の夜のすばらしさが賞讃されているので、「さ」が受けているのは、その直前の、秋を賞讃した「秋の夜に心を寄せて答へ給ふ」の部分となる。

問5 「いづれにか御心とどまる」は、各季節のそれぞれの見所を述べた資通の発言に続いているので、資通の言葉である。「(あなたがたは) どの季節にお気持ち寄せますか」と、孝標女と同僚の女房の二人に問いかけたもので、「秋の夜に心を寄せて答へ給ふ」

は、敬語があることから孝標女の同僚の女房で、続く「さのみ同じさまには言はじ」と思つて「あさみどり」の歌で春の夜のすばらしさを主張したEが孝標女ということになる。Gは「秋に心寄せたる人」の歌であるから、詠者は同僚の女房である。Fは資通の歌ということになる。祐子内親王はこの場面に登場していない。

**問6** 「この場面自体の季節」が問われているのであるから、地の文から季節を暗示する表現を探す。すると、3～4行目「星の光だに見えず暗きに、うちしぐれつつ、木の葉にかかる音のかしき」の部分がみつかる。「時雨」は秋の末から冬の始めにかけて降り止んだりという降り方をする雨のこと。よつて正解はウ。

**問7** 四季の風情についての資通の考えは、問1の傍線部Cについての考察でまとめた通りである。この考えが三人で語り合ううちにどのように変化したのかは、Fの資通の和歌に集約されている。春を愛でる孝標女の歌を聞いて、資通は、「それでは、(あなたは)秋の夜(の風情)はお見限りになったように聞こえますね」と言い、歌を詠む。その意は「今夜から後の寿命がもしもあるならば、それでは春の夜を(あなたと出会った今夜を思い出すための)よすがと思ひましよう」というもので、これに対して秋を評価した同僚の女房は「あなたがたは二人とも春に心を寄せてしまったようですね」と詠んでいる。以上の点を考慮に入れて、資通の思考の過程が明確になるように注意してまとめる。

## 4章

### 【問題】(演習)

出典：紀貫之『土左日記』(問7の引用は李白『贈汪倫』) / オリジナル問題

### 現代語訳

(承平四年〔九三五〕陰暦十二月二十七日、(土佐の国の) 大津から浦戸を目指して(船を) 漕ぎだした。(その出発前に) このよ  
うに(いろいろなことが) あった最中に、都で生まれた女の子が、(育ったこの土佐の) 国で突然亡くなってしまったので、(父親であ  
る前土佐守の貫之さまは) ここ最近の忙しい出発準備を見ても、一言もしゃべらない。都へ帰るにつけても、娘さんが(今は亡くなっ  
てこの世に) いないことを悲しみ(亡き子を) 恋い偲ぶばかりである。(周囲に) いる人々も(その様子を見るとお気の毒で) たまら  
ない。(そこで出発前の) この間に、ある人〔「実は貫之自身」が書いてさし出した歌、

A 都へと……都へ(早く帰ろう)と思うが、(それにつけても) 悲しいのは、(一行の中に) もう帰らない人があるからだだったので  
またある時には、

B あるものと……(あの子はもう死んでしまったのにそのことを) つい忘れては、やっぱり近くにいるものと思つて、亡くなった子  
のことを「あの子はどこ」と問うてしまうのはなんとも悲しいことよ

とそう言っていたうちに、鹿兒の崎というところで、国司の兄弟やまた他の人々のだれかれが、お酒や何かを持って(一行の乗った船  
を) 追つてきて、磯辺までおりて座りこみ、(悲しくて) お別れしにくいということを言う。国司の館の人々の中で、この(ここまで  
見送りに) やつて来た人々こそ真心があるようだとは(一行の間で) ささやか(またそのような素振りが) ちらちらと見える。この  
ように別れが辛いことを言つて、その(私たちを見送りに来た) 人々が、(あたかも) 漁の網をみんなで(足拍子を揃えて) この海辺  
で担ぎ出した(ように、声の調子を合わせて詠みだした) 歌、

C 惜しと思ふ……(都へお帰りになつてしまふのを) みんなが惜しいと思つているあなたさまが、もしかするとこの地に留まつてく

ださるかもしれないと思って、(葦<sup>\*</sup>辺に鴨がうち群れるように) 大勢して私たちはやって来たのですと詠んで(そこに) 控えていたので、たいへんその歌を賞めて、去ってゆく人(の長である前国司の貫之さま)が(このように) 詠んだのであった。

D 棹させど……棹をさして深さを知ろうとするが際限もなくて計ることもできぬ、その(海<sup>\*</sup>のように) 深いお気持ちをあなたの方の中に見ることです

といって(居合わせたみなが惜別の情感にひたって) いるまさにその時に、船頭は情趣も(一向に) 理解せず、(ただもう) 自分のはうはお酒を(たくさんに) 呑んでしまったところから、さつさと出発してしまおうというので、

「潮が満ちてきたよ。風もきつと吹いてくるにきまってまさあ(、早く舟出の準備にかかりましょうや)」

と騒ぐので、(一行も仕方なく) 船に乗り込もうとする。この時に(そこに) いた人々が、ちょうど折節になつた漢詩などで、この別れの時にふさわしいものを朗唱する。また、ある人は、(この土佐は) 西国なのに(東国の) 甲斐の民謡などを歌う。(そして) のど自慢の彼に対しては、

「そんなに(素晴らしく) 歌うからには、(あの中国の故事にもあるとおり) 船屋形の塵も(あなたの歌に感動して) 舞い上がり、空を流れてゆく雲も(耳を傾けてここにしばらく) 漂ってしまいますよ」

などと言っているのであるようだ。

〔訳注〕

\*葦鴨の Ⅱ 「うち群る」にかかる枕詞。

\*わだつみの Ⅱ 「深き心」にかかる枕詞。

漢詩

書き下し文

汪倫に贈る

李白舟に乗りて将に行かんと欲するや

忽ちに聞く岸上踏歌の声

桃花潭の水深きこと千尺

汪倫の我を送るの情に及ばず

現代語訳

私（李白）が舟に乗って今にも旅立とうとしていると

にわかに岸辺に聞こえるのは（私を送るために）足を踏みならして調子を取りつつ声を揃えて歌う声ではないか  
ここ桃花村を流れる河の淵は深さが一千尺もあるというが

（わが友）汪倫の私を送ろうとしてくれる真心の深さには（この村の川の深さも）とうてい及ばないのである

解答

問 1 (エ)

問 2 (ア)

問 3 (エ)

問 4 (イ)

問 5 (エ)

問 6 (イ)

問 7 (1) || (オ)

(2) || (ウ)

(3) || (イ)

問 8 (ア)・(エ)

出典：紫式部『紫式部日記』「寛弘七年正月二日」の一節 / 立教大学 文学部A 94年

## 現代語訳

(正月二日に、上達部・殿上人たちが) 清涼殿に御参上になって、(一条) 帝も殿上(の間)にお出ましあそばして、(そこで、初子の日のお祝いの) 管弦の御催しがあった。道長さまは、いつものように酔っておいであそばす。(私はそんな殿のお相手をするのも面倒だと思って、じっと隠れていたところ、(道長さまに見つかってしまい)「どうして、(そなたの) お父上(の為時どの) は、(私) が一条) 帝の御前の(管弦の) 御催しに(出席を) 指名したのに、伺候しないで急いで退出してしまったのか。(そなたのお父上は) ひねくれている(人だな) などと(おっしゃって)、不機嫌でおいであそばす。「(その、親の罪が) 許されるくらい(すぐれた) 和歌を一首(詠んで) 差し出せ。親の代わりとして(娘であるそなたが) な。(今日は新年の) 初子の日だ、(この日にちなんだ歌を、さあ早く) 詠め詠め」と(私を) お急ぎ立てあそばす。(だが、そういわれたからといってすぐに歌を詠んで) さっと口に出すとしたら、(才気走りすぎていて、かえって) あまりにも不格好だろう(から詠みもせずにそのまま紛れるに任せた)。(道長さまはお酔いになったとはいえ) さほど(泥酔と言うほど) でもない御酔い具合であるようだから、ますますお(顔の) 色合いが美しく、燈火(に照らされた) 御姿も際立っていて理想的な御様子で、「数年来、(私の娘の彰子) 中宮が(、皇子がお生まれにならなかった)、物寂しそうにして、お一人でおいであそばすのを、(こちらとしても) 何となく物足りないように拝見していたのだが、(今では) このようにわずらわしいほどに、右左と(お二人もの若宮がたと御一緒なのを) 拝見するのは嬉しいものだ」と(おっしゃって)、お寝み<sup>やす</sup>みでおいであそばす(二人の) 若宮がたを、(帳台の垂衣を) 持ち上げては御拜見になる。(そして、道長さまは)「野辺<sup>\*</sup>に小松のなかりせば(「子の日のお祝いをする野に小松がなかつたら、千代の栄えを祈るしるしとして、一体何を引いたらよいか」という歌ではないが、小松がゆくゆくは大木となるように将来は隆々と成長するだろうこの若宮たちがいなくなつたら、わが世の千年の繁栄のあかしを何に求めようかと、私は心配だったが、いまやもう何も心配することはない)」と(古い賀歌を) お口ずさみになる。(さきほど命じられたときに私が即興で詠んでいたとすればその) 新しいような歌よりも、(このようなおめでたい) 折にぴったりの、(古歌を朗詠なさる) 道長さまの御様子は、すばらしくお見えあそばす。

〔訳注〕

\* 『拾遺集』の「春」の部にある壬生忠岑の作った初子の古い賀歌。

解答

問 1 (a) 〓 (藤原) 道長 (b) 〓 (藤原) 為時 (c) 〓 (藤原・中宮) 彰子 (d) 〓 敦成・敦良 (両親王)

問 2 (1) 〓 6 (2) 〓 4 (5) 〓 4

問 3 (3) 〓 2 (4) 〓 3

問 4 (ア) 〓 管弦の御催し〔6字〕 (イ) 〓 宮中から退出してしまったのか〔14字〕

(ウ) 〓 物足りず寂しく〔7字〕 (エ) 〓 わずらわしい〔6字〕

(オ) 〓 眠っていらっしやる〔9字・いずれも解答例〕

問 5 I 〓 いとど御色あひきよげに、火影はなやかにあらまほしくて、〔27字・5行目〕

II 〓 (初め) あたら (終り) たまふ (まふ) 〔8行目〕

問 6 実子の中宮の皇子たちの成長に、外祖父としての自らの繁栄を見るうれしさ。〔35字・解答例〕

## 現代語訳

美作守顕能の所に、若々しい僧で、(家の中に)入って来て経を大層ありがたく読む者がいた。主人が(それを)聞いて、「何をしていらっしやる方か」と言う。(僧が)近くに寄って答えるには、「乞食でございます。ただ、家ごとに物乞いをして歩き回ることはしておりません。西山にある寺に住んでおりますが、ちょっとお願い申し上げたいことがあります」と言う。様子が、むやみに軽蔑すべきではなかったので、詳しく問い尋ねる。「申し上げるとなると、本当に異様なことなのですが、某所の年若い女房と関係を結んで、洗濯などの世話をさせておりましたが、思いのほかに、妊娠して、今月が出産の時期に当たっておりますので、『すべて私の過ちなので、(彼女が出産のために)とりわけ外出しない間は、(食事など)彼女が命をつなぐだけのものは与えたいものだ』と思ひ申し上げておりますが、どうにもこうにも、私の力が及びませんので、もしかしたら、同情していただけるかもしれないと思ひまして」と言う。事の初めは、なるほどとは思えなかったが、「(僧の立場であれば)そう思うだろう」とかわいそうに思つて、「大変たやすいことだ」と言つて、(必要な分を)推し量つて、人ひとりに持たせて、一緒に行かせようとする。この僧が言うには、「いろいろとひどく恥ずかしいです。(自分の住処が)殊更にそこだと知られたくありません。自分で持つて行きますしよ」と言つて、持てるだけのものを背負つて出て行った。

主人は、やはり不審に思つて、そういうことに心得ある者ひとりに(後を)つけさせた。身なりを目立たなくして、見え隠れしてついで行ったところ、北山の奥に遙か遠くまで入つて行き、人も通わない深い谷に入った。一間ぐらいのみすばらしい粗末な庵の中に入つて、物を並べて、「ああ苦しい。三宝の助けがあったので、安居の修業のための食物も用意できた」と独り言をつぶやいて、足を洗つて静かになった。この使いの者は、「たいへん珍しいことだなあ」と(思いながら)聞いていた。日が暮れて、今宵は帰れそうにないので、木蔭にそつと隠れていた。夜が更けて、法華経を一晚中読む声が、たいそうありがたくて、涙が止まらない。夜が明けるとすぐに帰つて、主人に、昨夜の様子を申し上げると、驚きつつ、「やはりそうだ、只者ではないと思つた」と言つて、もう一度手紙をやつた。「意外にも、安居の修行のための食物とお聞きしました。それならば、先日の物では少ないでしょう。これを差し上げます。更に

必要な事がありましたら、必ずおっしゃってください」と（家来に）言わせたところ、経を読んで、なんとも返事を言わなかった。しばらく経ち待ちきれなくなって、物を庵の前に並べ置いて帰った。

数日経って、「それにしても、例の僧が心配なことだ」と思って、訪れたが、その庵には誰もいなくて、前に与えた物を、外に持ち出したと思われる、後の贈り物は、そのまま置いてあったので、鳥や獣が食い散らかしたようで、あちらこちらに散乱していた。

本心に道心のある人は、このように、自分の徳を隠そうと、罪科を示して、尊ばれることを心配したのだ。もし、人が、俗世間を離れたけれども、よく世を捨てたと言われよう、尊い行いをする（人に）知られようと思うならば、それは世俗の名声（を求めること）よりもひどい。このため、ある経典では、「出家者の名声は、例えるならば、血で血を洗うようなものだ」と説いている。元の血は洗われて、落ちもしようか、わからない。今の（新しい）血は、（その身を）ひどく汚す。愚かなことではないか。

### 解答

問1 口・ニ 問2 イ 問3 ハ 問4 ホ

問5 口 問6 ニ 問7 ホ 問8 出世 問9 ホ

問10 (1) 猶<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>血洗<sup>ニ</sup>血 (2) 口 (3) ニ

### 解説

『発心集』の作者は、鴨長明。『方丈記』（一二二二年成立）との前後関係には諸説あり、成立年次は不明である。全八巻で、百余りの仏教説話（主に本朝の往生譚<sup>たん</sup>）を集めているが、巻七・八については、後人の増補とする説がある。問題文は、巻一の末尾にあり、出家の名聞を避けるために、わざと不名誉な嘘を言うという偽悪説話である。

問1 完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」を識別する設問。「ぬ」が活用語の連用形に接続することに着目すればよい。イは連体形「べき」に接続していることから、断定の助動詞「なり」の連用形だとわかる。ハはナリ活用形容動詞「めづらかなり」の連用形活用

語尾、ホはナ行変格活用動詞「往ぬ」（いぬ）の連用形活用語尾となる。口はラ行四段活用動詞「入る」の連用形「入り」に、ニはワ行上一段活用動詞「居る」（ゐる）の連用形「ゐ」に、それぞれ接続しており、この二つが正解。「に」は他に、副詞の一部や、格助詞・接続助詞などの種別がある。

問2 傍線部1の「ただならず」は、形容動詞「ただなり」の未然形に打消の助動詞「ず」が付いたもので、直訳すると〈普通でない〉という意味だが、「ただならずなる」（「なる」は動詞）という言い回しで、妊娠していることの婉曲表現として慣用的に用いられている。「なま女房を相ひ語らひて（＝年若い女房と関係を結んで）」「はからざるほかに（＝思いのほかに）、ただならずなりて」「偏に我があやまち（＝すべて私の過ち）」といった問題文の文脈からもわかる。従って、傍線部1の直後の「此の月にまかり当りて」云々は、今月に出産の予定であることを示す。

問3 古文では、女性に対しても「彼」を用いることに注意する。問題文の「彼」が「なま女房」を指していることは明らかなので、「彼が命つくばかりの物」は、イ〈彼の食事〉やロ・ホ〈私の食事〉ではなく、ハ・ニ〈彼女の食事〉と解釈すべきである。

ニ「私が世間を通れていた間も」は、問2で説明したように、女が妊娠して、出産の時期が迫っているという事情をふまえるとうまくつながらず不自然。よって、正解はハ。

問4 「さこそ思ふらめ」の「さ」は指示語だが、その指示内容は直前の僧の会話文に示されている。設問では、それに対して、主がどう感じたかが問われているが、傍線部3の直後の「いとほしく覚えて」に主人の気持ちが明示されている。形容動詞「いとほし」は〈かわいいそうだ〉という意。よって正解はホ。なお、傍線部3の直前に「事の起りは、げにと覚えずなれど」とあるように、僧の立場で女性と関係を持つということに対して、主人は決して、感心（＝尊敬）したり共感したりしているわけではない、しかし軽蔑しているのとも違う、その気持ちを読み取るう。

問5 傍線部4の「つつまし」は〈恥ずかしい、遠慮される〉などの意。この設問で問われているのは、傍線部のように言って、つき添いを断った（＝自分の住処を知られたくなかった）のはなぜかということである。表面上は、ニ「粗末な住家」を恥じての言葉

と見られるが、これは表向きの理由であって、僧の「真意」とまではいえない。「真意」については、問題文の主題と関連させて考えなければならない。

イ「女との生活」はその後の問題文の内容に反する。

ハ「ただの物乞いであると思われなくなかった」では、僧がむしろ自分の本当の姿を知ってもらいたかったことになり、筆者が批判する賞賛や、名声を求めている人物となってしまう。

ホはどうか。僧が女を妊娠させたと嘘をついたのは、「安居の食」とあることから仏道修業のための食を求めるための方便であり、「生活の糧を得るため」ではない。よって、正解はロ。ちなみに、僧というものは平素は乞食托鉢などにより食物を得るが、安居の期間中は、外出せず修行に専念するため、食物などは、あらかじめ準備しておく必要があったのである。

#### 問6

「き」と「けり」はどちらも過去の助動詞だが、厳密には「き」は単純過去、「けり」は回想・伝聞の過去と区別できる。全ての空欄の答えがわからなくても、Bともう一つ(A・C・Dのいずれか)がわかれば、正解が得られることに気がつけば、正解は導きやすい。ここでは全ての空欄について確認していく。まず、物語の地の文には、「けり」が用いられる(D)。会話は「き」が中心だが(A・B)、回想部分は「けり」になる(C)。係り結びの法則により、Cは「こそ」の結びで已然形、Dは「ぞ」の結びで連体形になることにも注意したい。

#### 問7

自分の徳を隠そうとして僧が行ったことが、傍線部の具体的な内容である。傍線部の「過」は(≪罪科≫)という意味。僧にとつての罪科とは、世俗と深い関係をもつこと、問題文に照らし合わせるとここではホ「女性と関係を結んだ」ことだとわかる。また、「事の起りは、げにと覚えずなれど(≪事の始めはなるほどとは思えなかったが≫)」の「事の起り」も僧が「女性と関係を結んだ」と語ること」を指しており、このことに対しては主も否定的な印象を抱いていたことがわかり、「過」として十分あてはまることだといえる。よって正解はホ。

イ「世の名声を望む」は、「徳を隠す」とことと矛盾する。

ロは、ここでは嘘をつく行為が「過」のではなく、その嘘の内容が「女性と関係を結んだ」という僧としてあるまじき行いだっただ点に着目すべき。また、「人から物を得ようとする」と「自体は、主も筆者も特に否定してはいない」。

ハ「我が身の徳を隠さむ」という僧の意図とは無関係である。

ニは、「世間に交わる」が「女性と関係を結んだこと」を指しているかが曖昧な点がホに劣る。また、一般的に僧というものが乞食托鉢をすることをふまえると、世間と完全に交流を絶つことはほぼ不可能に近いため、このことを「過」と言い切ることはできない。

### 問8

古語「そむく」には、現代語と同様に〈さからう〉といった意味もあるが、傍線部を含む段落の冒頭に「道心（＝仏道を信奉する心）ある人」とあることから、ここでは「世をそむく」つまり、〈世を捨てる〉ことを指す。それと同様の意味を持つ熟語を探せばよい。問題文の「出世」とは、立身出世の意ではなく、世俗を捨てて仏門に入ることを目指し、出家遁世と同意である。よって、これが正解。

### 問9

商学部では頻出の内容合致問題。

まず、イ「主の期待は、……裏切られた」ハ「修業は、……口実でしかなかった」は、明らかに問題文に矛盾する説明であるため不適当。これを選んだ人は、もう一度問題文を最初からじっくり読んでみよう。

ニは、僧が「後の贈り物」を放置したのは、最初の施し以上のものが不要だったからであり、「自らを極限に追い込む」のであれば最初の施しの分も受け取らないはずである。

ロ・ホはどちらも主題には合っているが、ロ「主は……本当の道心とは何かを初めて理解した」は、問題文に対応する記述がない。問題文の最終段落は、僧の行動の真意を筆者の立場から推測・賞賛したものである。よって正解はホ。

### 問10

まずは書き下し文と現代語訳を載せる。

#### 書き下し文

可汗休に謂はしめて曰く「我が国の人皆汝を殺さんと欲す。唯我然らず。汝が国已に突董等を殺す。吾又汝を殺さば、猶ほ血を以て血を洗ふがごとし。汚れ益んに甚だしきのみ。吾今水を以て血を洗ふ。亦善きことならずや。」

## 現代語訳

可汗が休に対して言わせたことには、「我が国の人は皆あなたを殺そうとしている。ただ私はそうではない。あなたの国では既に突董などを殺している。私がまたあなたを殺せば、あたかも血で血を洗うようなものだ。汚れはますますひどくなる。私は今水で血を洗う。なんと善いことではないか。

出典の『旧唐書』は、後晋の政治家・劉昫（八八七―九四六）の編んだ歴史書で、唐の成立から滅亡までを記録している。宋の歐陽脩らによる『唐書』（『新唐書』）に対して『旧唐書』とよばれる。どちらも正史に数えられている。

(1) 「猶」が再読文字で、「なほ……ごとし」（あたかも……のようだ）と訓読する点に注意する。「猶」以下は「以血」と「洗血」に分けて「血を以て血を洗う」とよむ。まず、「以」と「洗」の下にそれぞれ点をつけ、最後に「ごとし」に返るように一・二点とレ点を組み合わせればよい。比較的平易な問題。なお

(2) 「発心集」では、「世俗の名聞」と「出世の名聞」を対比させていることに注意する。仏教の教えは、欲望・執着に捕らわれた状態から解放されることにあり、欲望・執着の対象には、「名聞」つまり名声・名譽も含まれる。人は、本来「世俗の名聞」への執着から己を解放するために出家するはずなのに、多くの出家者が、今度は僧として「出世の名聞」にとらわれている。このことを皮肉をこめて「血で血を洗う」、汚れを落とすはずのものが、今度は別の汚れとなり、それに染まってしまう、と言っているのである。傍線部を含む一文の「水を以て血を洗ぐ」は、「血を以て血を洗ぐ」と対比的に用いられた表現であり、この表現を『発心集』にあてはめると、「水」と対応しているのは「過」。問7からもわかるように、僧は、僧の身で女性と関係を結んだなどと嘘をついて罪科を示すことで、僧としての名声を得ることを避けようとしたのである。よって、正解は口。なお、「血で血を洗う」という慣用句は、親族間の血肉の争いの場合にも用いるが、ここではそれとは別の意味であることに注意したい。

(3) 「不亦……乎」で、「また……ならずや」と読み、へなんと……ではないか、の意の詠嘆形の構文となる。よって、正解は二。河汗が、自分のしようとしていることを自画自賛しているのである。

出典：『栄花物語』の一節 / 立教大学・経済学部 00年

## 現代語訳

主上(「一条天皇」)が、藤壺にお越しあそばすと、(お部屋の)装いや御様子はいかにもそうであるのにふさわしいが、「彰子の部屋の装飾や設備の豪華さは、道長の権勢が並ぶものなしであることをよく反映しているが」女御(彰子)の御様子やお振舞いを、「一条天皇は)しみじみすばらしく(みごとなお方であると)ご覧申し上げあそばす。姫宮(「脩子内親王」)をこのように(立派に)お育て申し上げたいものだ(一条天皇は) お思いあそばすにちがいない。他の女御方は皆すでに(一人前の女性として)成長しきちんとしておられ、大人びておいであそばすから、(もう)今はこのお方を、ご自分の姫宮を大切に「養育申し上げなされるかのように」ご覧になられるのであった。ここ数年の、(後宮の女性方を)見馴れておられた(一条天皇の)御目からは、(そうした後宮の成人した女性方とは)比べようもないほどしみじみとかわいらしいと(彰子のことを)お思い申しあげあそばすことに違いない。(一条天皇が)打橋(「建物と建物の中の、通路としての利便性を考えて取りはずしでできるようになっている渡り廊下」)をお通りになるとすぐに(漂ってくる)このお方(「彰子」)のお部屋の(香の)薫りは、今(どこにでも)ある空薫物(「どこからともなく薫ってくるようにたく香」)ではないので、あるいは、あれこれの何かの香の薫りなのであるらしいが、それとなく薫りをただよわせて、何となくよい薫りをおくつて(くるので)、(一条天皇が女御彰子のお部屋に)お入りあそばしてから後の移り香は、ほかの(女御や更衣といった)方々(のお部屋にお入りになった時)とは全く違っていてすばらしいとお思いになるのだった。ごくありきたりの御櫛箱や硯箱の中に入れてある物からして、風情のある珍しい品々の有り様に、(一条天皇は)すっかり見とれておしまいになって、夜が明けるとすぐに(女御彰子の)お部屋にお出かけあそばして、御厨子などもご覧になると、何に(一条天皇の)お目のとどまらないものがあるか(、何もかもが帝の目をひきつけずにはいられないのである)。(巨勢)弘高が歌絵を描いた冊子に、(藤原)行成卿が歌を書いたものなど、たいそう趣深くご覧あそばさずにはいられない。(一条天皇は)「あまりおもしろがっているうちに、すっかり政治のことを忘れた愚か者に(きつと)なってしまいそうだ」などと仰せになっては、お帰りあそばすのであった。(一条天皇は)昼間などに(女御彰子のお部屋で)お寝みあそばしては、「彰子が)あまり幼い御様子であるから、(彰子のおそばに)お寄りすると、(自分自身のことを)翁かと思わずに

はいられなくて、私は恥ずかしく(なりますよ)などと仰せになるのだが、(一条天皇は)現在二十歳ほどでいらっしやるようである。同じ帝と申しても、どうであろうか(中には)未熟で物足りないところ(のある方)もおありになるものだが、この帝(「一条天皇」は、御容姿をはじめとして、並外れて美しく、驚き呆れるほど(のすばらしさ)でいらっしやる。(一条天皇は)お酒などについては少しお召し上がりになった(方である)。(また、一条天皇は)御笛を、言葉では言い表せないほど見事にお吹きあそばすので、(おそばに)お仕える人々もすばらしいことと拝見する。(女御彰子がまだ)固くかしこまっている御様子なので、(一条天皇が)「この笛を、こちらを向いてご覧なさい」と(彰子に)申し上げあそばすと、女御殿は、「笛は音を聞くものなのに、見るなどということがあるのでしょうか(、「見る」までもないことでしょうか)」と答えて、(一条天皇のおっしゃることを彰子が)お聞き入れあそばされないので、(一条天皇が)「だからこそ、あなた(「彰子」は子供(でいらっしやるのですよ)。七十の年寄りの言うことを、そんなふう(私を)やりこめておしまいになるとは。ああ、恥ずかしいな」と冗談を申し上げあそばす御様子をも、(おそばに)お仕える人々は、「何ともすばらしいことであるよ。この世のすばらしいこと(の例)としては、ただ今の私たちの宮仕えがふさわしい」と(口々に)言い、(心の中で)思うのであった。(女御彰子は)何事も肩をお並べになる人もない御様子でいらっしやる。

**解答**

- 問1 (a) すばらしいと〔6字〕／みごとであると〔7字・別解例〕 (b) 愛らしいと〔5字〕／かわいらしいと〔7字・別解例〕  
 (c) 夜が明けると〔6字〕 (d) 愚か者〔3字〕 (e) 驚きあきれるほど〔8字〕

- 問2 5 問3 1 問4 3 問5 3 問6 1

問7 一条天皇が幼い彰子の機智に参ったから。〔19字・解答例〕

**解説**

問1 (a) 「めでたく」の終止形は「めでたし」。動詞「めづ」が形容詞化したもので、「愛で甚し」の意味とされる。「すばらしい・みごとである」という意味である。ここは連用形なので、「すばらしいと」「みごとであると」などとする。「思し見たてまつらせた

まふ」の主体は「上」（＝一条天皇）で、天皇が彰子の様子やふるまいを「しみじみすばらしいとご覧申し上げあそばす」ということが述べられているのである。

(b) 「らうたく」の終止形は「らうたし」。「労（いたわる）に「甚し」が付いてできた語で、原義は「かばって世話をしやりたい」意。上品な可愛らしさを意味する語である。ここは連用形なので、「かわいらしく」「かわいらしいと」などとする。一条天皇は数年来後宮の大人びた女性たちを見慣れていたので、その目が、十二歳で入内した女御の彰子に移って、このように感じたというのである。

(c) 「あけたてば」は「あけ／たて／ば」と品詞分解される。「あけ」の終止形は「あく」で、ここは動詞「たつ」に続いているので連用形である。連用形が工段となっていることから、四段活用の「飽く」ではなく、下二段活用の「明く」であることがわかる。「夜が明ける・年が明ける」という意味である。「たて」は接続助詞「ば」に続いていることから、未然形か已然形のどちらかであるが、未然形と取ると「もしも夜が明けるならば」と、仮定の意味になり、前後の文意が通りにくくなるので、ここは已然形と考える。已然形が「たて」となる動詞は四段活用の「たつ」である。四段活用の「立つ」は他の動詞に付いてその動詞の意味を強める働きをするのだが、特に訳出しなくても問題はない。ここは七字以内という制約があるので、「夜が明けると」とするとよい。10行目に「昼間などに大殿籠りては」とあるのと呼応しており、一条天皇が彰子のお部屋に夜が明けるとすぐにお渡りあそばして、昼などにも彰子のお部屋でお寝みになったりするほどに彰子に夢中であるということが述べられている。

(d) 「しれもの」は「痴れ者」と書く。「馬鹿者・愚か者」という意味である。一条天皇が、彰子に夢中になっている自分自身を、「すっかり政治のことを忘れた愚か者になってしまいそうだ」と言っているのである。

(e) 「あさましき」の終止形は「あさまし」。動詞「あさむ」が形容詞化したもので、ことの善し悪しに関わらず「意外で驚き呆れる」意を表す。動詞「あさましがる」、形容動詞「あさましげなり」などの派生語がある。ここでは気品のある美しさを表す「きよらに」（形容動詞「きよらなり」の連用形）に続いているので、肯定的なニュアンスで使われている。一条天皇が、二十歳という若さでありながら、容姿をはじめとして、並外れて美しく、意外で驚き呆れるほどのすばらしさでいらっしやる、ということである。

問2 傍線部は「さ／も／こそ／あら／め」と品詞分解される。「さ」は指示副詞で、普通は直前の記述を受ける。「も」「こそ」はど

ちらも係助詞で、「もこそ」で懸念や心配の意味を表し、「くするといけない・くすると困る」と訳すが、選択肢にそのようなものはないので、ここでは心配・懸念の意は特に含んでいないものとみる。「あら」はラ変動詞「あり」の未然形、「め」は推量の助動詞「む」（係助詞「こそ」に呼応して已然形となっている）である。「こそ＋已然形、く」の形で文が終始せずに下に続いていくときは逆接の意味になる。解釈にあたってのポイントは、以上述べたように、⑦指示副詞が受ける内容、①「もこそ」の解釈、②「こそ＋已然形、く」の三点であるが、⑦①に対応する選択肢はないので、②が訳出されている選択肢から正解を探っていくことになる。選択肢のうち12は文末が順接の意になっているので除外。残る345のうち、34は「さ」を「それほど」と訳出しており、不適切である。よって5が正解。「いかにもそうであるのにふさわしいが」というのは、彰子の部屋である藤壺の様子のこと、彰子は当代きつての権力者である藤原道長の娘であるので、その部屋の装飾や設備の豪華さは、道長の権勢が並ぶものなしかることをよく反映しているのだけでも、一条天皇が彰子を「あはれにめでたく思し見たてまつらせたまふ」のは、そのためだけではなく、彰子自身の様子や振る舞いがすばらしいからでもある、という含意があるのである。

### 問3

「他御方々」は「みなねびととのほらせたまひ、およすけさせたまへれば」とある。「皆一人前の女性として成長し、きちんとしておられ、大人びておいであそばすから」という意味である。それに対して「ただ今この御方をば、わが御姫君をかしづき据ゑたてまつらせたまへらむやうに」と一条天皇はご覧になったというのである。「この御方」と「他御方々」とが対比されているのである。では「この御方」とは誰なのか。2行目に「姫君をかやうにおほしたてまつらばや」とあるのは、1行目の「女御」（＝彰子。九八八年生まれ。入内したこの年九九九年には数え年十二歳）のように、自分の娘（＝脩子内親王。一条天皇と定子との間の子。九九六年生まれ。このとき数え年四歳）を、お育て申し上げたいものだと一条天皇がお思いあそばすに違いないということで、3行目に「わが御姫君をかしづき据ゑたてまつらせたまへらむやうにぞ御覽せられける」とあるのは、「ご自分の姫君を大切にご養育申し上げあそばすように（この御方を）御覧あそばすのであった」ということである。これらのことから、「この御方」が一条天皇の姫君という立場ではないこと、成長しきつていはいえない年齢であること、天皇がご自分の姫君をこのように育てたいと思うようなすばらしい方であること、などが読み取れる。以上のことを勘案すると、「この御方」が一条天皇の女御彰子を意味していることが理解されるだろう。つまり「他御方々」というのは彰子以外の女御たちのことを意味しているということになる。この時代（摂関期）には「女御」というのは天皇の妃を意味する。よって正解は1。3の「女房」は、平安時代には「宮中や貴族

の私邸に一室を与えられて仕える住み込みの女性」のことであるから注意すること。「房」というのは「独居房」の「房」である。45は文脈に関わらないし、登場してもいないので除外。上に述べたことから2も不適。

#### 問4

傍線部は「なり／ぬ／べか／めれ」と品詞分解される。ここで注意するのは「べか」である。これは助動詞「べし」の連体形「べかる」が撥音便化して「べかん」となったもので、「ん」が表記されない形である。「ぬべし」という形で使われる「ぬ」は《確述（強意）》であるから、「きつと・今にも）くしそうだ・くするに違いない」などと訳す。「めれ」は婉曲の助動詞「めり」（係助詞「こそ」の結びで已然形になっている）で、「くようだ」と訳す。伝聞の意を含む2、懸念の意を含む4、禁止の意を含む5は、それぞれ対応する古文がないので除外。天皇が自分自身のことについて言っているのだから「見える」という表現はそぐわないので1も除外。残る3が正解である。

#### 問5

「仰せられ」は「言ふ」の尊敬語「仰す」に助動詞「らる」が付いた形である。敬語動詞に続く「る」「らる」は「尊敬」である。よって正解は3。「る」「らる」が「尊敬」の意味になるのは、主語が身分の高い人である場合や、このように敬語動詞が続いている場合などである。問題文では他に2行目「思しめさ・る」、4行目と9行目の「御覽ぜ・られる」、6行目「思さ・れ」などがそうである。なお「れ給ふ」「られ給ふ」の形の「る」「らる」は「尊敬」の意味にはならないということも覚えておこう。「自発」の意味になるのは、自称（＝一人称）に付いている場合や、「嘆く」「泣く」などの心情に関係する語に付いた場合などである。「くされる」と訳せる場合は「受身」、打消語を伴っている場合は「可能」の意味になることが多い。

#### 問6

傍線部を品詞分解すると「聞か／せ／たまは／ね／ば」となる。主語は彰子、「せ／たまは」は最高敬語である。直訳すると「お聞きあそばささないの」となる。傍線部の直前の部分の文意を取ってみよう。「これうち向きて見たまへ」は一条天皇の言葉で、天皇が彰子に、「この笛を、こちらを向いて御覧なさい」と言い、それに対して彰子は「笛は音を聴くものなのに、見るなどということがあるのでしょうか」と反駁している。「御覧なさい」という言葉尻を捉えて、「笛は聴くものであって見るものではない」とこまっしやくれた口答えをしているのである。2の「笛を吹く」、5の「申し上げ」に対応する古文はないので25は除外する。34は、傍線部だけの訳であれば間違いとは言えないが、傍線部直後の天皇の発言へのつながりという点で必然性がない。よって

1が最もふさわしい。幼いながらも利発な彰子に八歳年上の天皇がやりこめられている図を理解しよう。

**問7**

「恥づかし」は「(相手が立派なので)気が引ける」「(気が引けるほど相手が)立派である」という意味である。傍線の直前には「七十の翁の言ふことをかくのたまふよな」とある。一条天皇は幼い彰子の機知にやりこめられてしまい、おそらくは苦笑しつつ、これは一本取られた、という意味のことを言っているのである。以上のことを制限字数以内でまとめる。八割以上は記述するよう  
にしよう。

出典：『松浦宮物語』十唐・元稹『会真記』／早稲田大学 政治経済学部

甲

現代語訳

(氏忠が商山に赴くと、) 高い建物の上から琴の音色が聞こえてくる。遙かに(その音を) 目当てにしながら(山を) 登ってゆくと、道はたいそう遠い。(やっと辿り着くと) その(宮殿) は鏡のように光り輝く瓦を並べ連ねて建ててあるものの、建物の数は少なく、(高殿たかどの) に付随する) 簡単な造りの家に(華陽公主の召使といった) 人々が暮らしているのに違いのないと思われるが、(氏忠が) わざわざ木陰に隠れ隠れしては高殿を目指して登ると、(老翁が) 言ったとおりにも言えないほど美しい宝玉のような女性が、たった一人で琴を一心に弾いている。「公主に会っても) 乱れる心は持つな(「心を乱すな)」とは、(老翁が) あれほど言っていたが、(氏忠は公主を) 一目見るやいなや(その美しさに) 我を忘れて、(それまで) 何人も見てきた舞姫たちの花のような顔も、ただただ土(でできた人形) のように(味気なく感じられるように) なってしまった。(その公主の様子といえば、他の人なら) あまりに仰々しく見えてもおかしくない簪や、(その簪で成人女性の盛装にふさわしく) 髪を結び上げていらつしゃる顔立ちは、まったくつんと澄ましたところが無い。上品で心惹かれ、清らかで愛らしく見えること(と叫びたら)、ただもう秋の月が一点の曇りもなく夜空に澄み渡って昇っている(のを見るような) 気がするのだが、(氏忠は) たいへんな心の乱れを抑えつけて、忪えなおし忪えなおししてはその(公主の) 琴を聞いていると、さまざまな奏法の音色がひとつに合わさって、空に響きわたっていることは、まことに以前(に聞いた老翁の琴のすばらしい音色) よりも遙かに優っている。(公主は氏忠に気付いても驚いた様子もなく) あれこれとおっしゃることもないが、(氏忠が) ひたすら夢の中で道に迷って(ぼうつとして) いるような気持のまま、あの(老翁から) 手に入れた琴を取り出してかき鳴らすのを(公主は) 見て、それまでの曲を(やめて) 改めて弾き直して、初めから(琴の道を極めようと志す) 人が練習するのにふ

さわしい曲目を、すらすらとひととおりお弾きになるのを（氏忠は）聞くとすぐに、そのまま迷いもせずその（公主の）音に合わせてかき鳴らすうちに、自分の気持ちも落着きをましてゆくとともに、次第に（演奏に）技巧的なところも加わって、間もなく（公主と）同じ音色で音が出るので、曲（のおもむくまま）に身を委ねていっしょに弾いていると、支<sup>つか</sup>えるところもなく弾き終わってしまった。

こちら（の公主）も、夜が明けてゆくので、琴を（傍らに）押しつけて（奥の部屋へ）帰ろうとなさるときに（なると）、（氏忠は）悲しいことといったら他に比べようもない。思いがけない涙がこぼれ落ちて、言いようもない気持ちがあるが、（一方では）公主もたいたい物思いに心を乱していらっしやる様子で、月の面を物寂しげにぼうつと眺めておいでになる横顔は、たとえるものもなく（美しく）見える。（こうした別れの場面には）よくあるように漢詩を作って贈りあって、別れようとするときに、（公主は）「今日の（続きの）残りの曲は、九月の十三夜から五晩をかけて（伝え）終えることにしましょう」とおっしやる。（続けて公主が）

雲に吹く……雲の上を吹いてゆく風（さえ）も届かない波路（の果ての遠い国）から（私のもとを）訪ねてくるであろう人の（いること、そしてそれがあなただという）ことは、なんとなく（ではありますが、前々からはつきりと）わかっていましたとおっしやるので、（氏忠が返歌を）

雲のほか……雲（の通り路）よりももっと遙かに遠くのところの国から来た私も、（故国を離れるときの悲しい別れがありました）が（それ以上にこれほどの別れを味わったことでしょうか、いいえ、こんなにつらい別れは経験したことはありませんでした）と申しあげるとまもなく、（召使いの）人々が（公主を）迎えに参上する音があるので、わきのあたりの山の陰から、（公主が）おっしやるとおりにそつと出ていった。

（氏忠は、夜が）すっかり明けてしまわない前に（帰に着こう）と急いで帰ったが、午前十時ごろ（になってしまつてやつと）床にお就きになったものの、からだから心が抜け出すように物思いに耽らないではいられず、「この上もつとひどい恋の悩みも始まつてしましうそだなあ」と、心の中で思い乱れるばかりである。その晩は（氏忠が訪れると）都合が悪いように（公主は）おっしやつたものの、（行つても）無駄ではあるうが、（公主がお屋敷に）いらっしやる様子（だけで）もなんとか見たいものだ（氏忠は）思うのだが、（あいにく）皇帝は、月を愛でる宴会をお催しになって、一晚じゅう管弦を楽しんで（夜を）お明かしになる（ので氏忠は公主のもとへ行けない）。明くる日も（帝は氏忠の）退出を許可なさらず、（氏忠を身近に）引きつけて（一日を）お過ごしあそばす。（氏忠としては）雨がひどく降って心細い異国での夜も、今となつてことさらに（恋しい公主の）面影が離れないのは、（我ながら）どうにもやりきれない身の上の悩みである。（そんな気持ちで氏忠がつぶやいた歌は、）

知らざりし……今まで経験したこともなかった(恋の)物思いを異国暮らしの(心細い)身の上に加えることとなって、ますます涙がちな夜の雨であることよ〔Ⅱ雨夜の寂しさにいっそう涙の雨が加わることだ〕。

乙

書き下し文

張曰はく、「余始め孩提より、性俗に合はず。或は時に紈綺閑居するも、曾て流眇する莫し。近日一席の間、幾自ら持せず。数日来、行けば止まるを忘れ、食らへば飽くを忘る。恐らくは旦暮を逾ゆる能はざらん。若し媒氏に因りて娶らば、則ち納采問名して、三数月の間、我を枯魚の肆に索めん。爾其れ我を何とか謂はん」と。

現代語訳

張生が(美女の侍女に)言うには、「僕はもともと子どものころから、(自分の)性格が世間の風潮に合わなかったんだ。(それでも)どうかするとたまには美しく着飾った女性と同席して、(でも結局のところ)手持ちぶさたに感じるといったことはあったけれど、いっぺんも(女性に)流し目を送ったことはなかったんです。(ところが)先日、(君のお仕える美人に会った)あの席では、なんとも自分(の気持ち)を抑えきれなくてね。(それから)この数日というもの、歩けばきまって立ち止まるのを忘れ(て行き過ぎ)てしまし、食べればきまって(自分でも)満腹しているのかさえわからない。(僕の命はもう長くもなさそう)たぶん今日明日をこえることはないだろう。(それなのに)もしも正式に仲人を立てる手続きを踏んで求婚するなんてことをしていたら、やれ結納だなんだと婚約の儀式があれこれ立て込んで、三ヶ月かそこいらのうちには、(干からびた)僕を乾物屋の店先で見ることになるでしょうよ。ねえ君、いったい(こんな)僕をどう思いますか」と。

解答

問1 A 〓 八

C 〓 〇

H 〓 〇

問2 〇

問3 〇

問4  
イ

問5  
ハ

問6  
③

問7  
なつかしう（5行目）・いたう（13行目）

問8  
イ

問9  
ぞくにあわず

問10  
右顧

問11  
ハ

問12  
口

## 現代語訳

(先生)におたずねします。『詩経』を学ぶことの利点は、孔子の(詩についての)言葉に尽されています。しかし現在の漢詩は(孔子が讚えた)古代の(『詩経』の)漢詩とは異なっており、したがって世間の儒学者は何かにつけてその無益(であること)を論じています。(これについて)どのように考えればよいのでしょうか。

ある人が以前私に訊いた。「あなたは漢詩を好む(が)、漢詩には何の得があるのか」。(それに対して)私は言った。「あなたは酒を好む(が)、酒には何の得があるのか」。(私に)問うた人が答えた。「何の得(がある)ということはない。(酒は)ただ私の生まれつきが好むものだ」。(それを聞いて)私が言った。「私(にとっての漢詩)も(あなたにとっての酒と)同様に私の生まれつきが好むものだ」と。以前にも言ったように、自分の技芸の利点を(人に)説き立てるのは蔑むにふさわしいことである。(たとえ)あなたが漢詩を好むとしても、他人に向かってその利点を説明してはならない。ただ自分の楽しみのため(にしていることだ)と言っておけばよい。

だが(あなたも)いずれ後輩や弟子を教育することがあるなら、(その時に)漢詩によって教えることもあるにちがいない。その時のために漢詩を学ぶことの利点を語ろう。

(『詩経』三百篇(を学ぶこと)の利点は、(あなたの言うとおり)聖人(すなわち孔子)の言葉に明らかなので今(私が)改めて言う必要はない。後の時代の漢詩も、その形式が変化しているとはいっても、現在でも相応の利点はあるものである。

まず中国の詩人の漢詩について言うなら、(多くの詩人の詠んだ)「従軍行」や「塞下曲」(といったテーマの数々の詩)を読むと、(そこで謳われている)億方の兵士が(死んでその)骨を砂漠にさらしているという苦しみは筆舌に尽しがたい。君主がもしそのことを理解すれば、(武力で異民族を圧倒するために無意味に)辺境を(領土として)開拓(しようと)するようなことはないはずだ。臣下の者がそのこと(漢詩に詠まれた兵士の辛苦)を知れば、辺境での(戦で)功績を挙げようと望(んで結局は犬死にで亡)んだりはするわけがない。さらに宮怨(宮中で寵を失った女の怨情)の詩を読めば、百人千人もの宮女(の中で)、孤閨を嘆き怨む者の多いこ

とは同情に値する。もし君主がこのことを知ったら、たとえ（その君主が）色好みであるとしても、必要もない女（「ちよつと関心を持つただけの女」を（その家族から）掠奪しないはずだ。臣下の者も同様に女色の淫楽に君主を誘うわけがない。その他遷謫（「左遷や追放」）の詩を読めば、（君主に疎まれて）孤立した家臣や（親に親しまれない）妾腹の子の心情を知り、乱離（「世が乱れて統一を失う」）の詩を読めば、人民の塗炭の苦しみを知る。（都市の）繁華の情景を述べた詩を見ては、豊かで高位の者が淫らな歓楽に耽る（ことが多い）のを知り、間適（「心安らかで静かなこと」）の詩を見ては、賢者が俗世間を避け（て隠逸の生活を送）ることを理解する。（漢詩の）どれが国を統治し一家を保持するための手本や戒めでないだろうか（、すべて手本や戒めである）。このことで後代の漢詩も、（本質的には）昔の詩（「『詩経』の詩」と違はないことを知らなければならない）。

（それに比べると）一体に我が国の漢詩は、中国の漢詩が国事に関係した（ことを詠む）ほどのことはなく（「唐詩ほど好んで国事に関わる主題を詠むわけではなく」、本当に書生の気晴らし（に詠んでいるようなもの）である。それでも（漢詩を）学んだだけの益はあるはずだ）。

文字（「漢字」）を知らない（ような）人（について）は言うまでもない（「ここでは問題にしない」）。あなたは試しに書物を読む人中で、漢詩を作る人と漢詩を好まない人とで異なっているところがあるのを見るとよい。漢詩を作る人は温和で（態度も）端麗である。漢詩を好まない人は（人に対して）酷くて情が薄い。漢詩を作る者は（人情をも踏まえた）道理に明るい。漢詩を作らない者は偏った見方をする。漢詩を作る者は教養があつて風流である。漢詩を作らない者は田舎臭くて粗野である。その理由は何であるか。詩は（人としての）情から詠み出されるものである。詩を好まないのは、その人の生まれつきの性質に情が少ないためである。もしそれが（「そういう人が」）詩を学べば、おのずと（その人の内面に）情を生むはずであるけれども、（そういう人は）自分の生まれつきの（特性が）偏っていることから、強いて努めて（詩を）学ぶことができない（「学ぼうという気を起こさない」）。ますます無情な偏屈さにおちいるものだ。

一般に人の心の中（の働き）を二つに分ければ、意と情とである。意は正邪利害を判断して、有益なことはそれを行ない、無益なことはそれをしない、これが意の職分である。そしてそのような無益（である）ということを知りながら、（無視することが）忍びがたく（それを）棄てることのできないところがあるのがすなわち情（というもの）である。だから、人（「知人や親族」）の死は嘆いたところで（旧には）戻らないことだとわかっている（、死者を悼む）悲哀の情は止まらない。憂さ辛さは口で言ったとしても消えるわけではないけれども、（それでも）必ず口で（「口に出して」）言い、楽しみは心（の中）で楽しんで終る（「楽しむだけでよい」）こと

ではあるけれども、これまた必ず口で言う。これが人情（というもの）である。もし役に立たないことは一切考えず、言わないことを善いとするなら、親の喪であつても長い期間服する必要はないはずだ。したがって人として情けがないのは、（感情を持たない）木や石と同じである。

漢詩文の領域では、文は意を表現することをその主眼とし、詩は情を述べることをその役目とする。だから情のない人は、絶対に詩を作ることができない。（たとえ）作つたとしても詩にならない（「形式をなぞつたものしかできない」）。そのような人は（たとえ）品行方正で威厳に満ちた君子だとしても、何らかの事にあたつての行いは必ず人情を尽していない（「人情の機微に通じていない」ところがあるはずだ。孔子は言う、「溫柔敦厚は詩の教へなり（「温和でよくよかで人情に篤い（ようになる）のは詩を通じて学びとれることである）」と。（この）「溫柔敦厚」の四字は、ただ、（ここでいう）「情」の一文字を言い表しただけである。これが私が弟子に漢詩を学ばせる理由である。

あなたが漢詩を好むので話はこちらに及んだ（「このようなことを話した」）。（私が語つた理由に）注意して（漢詩など理解しない）あなたと同門でない人々に（得々と）このようなこと（「漢詩を学ぶ利点について」）を語ることはないように。

### ○訳注

溫柔敦厚は詩の教へなり……『礼記』経解にある言葉。

### 書き下し文

#### 其の一

玉帛朝より回りにて帝郷を望む  
てんがいしつ　てんきやう　のぞ

烏孫歸り去りて王と稱せず  
うそん　かへ　き　わう　しょうせす

兵氣銷えて　日月の光と爲る  
へいき　しょう　じつげつ　ひかり　な

#### 其の二

北海の陰風地を動かして來り  
ほつかい　いんふう　ち　ゆる　あ　きた

明君祠上龍堆を望む  
めいくん　しじやうりやうたい　のぞ

日暮沙場飛びて灰と作る  
にちぼ　さばう　と　はい　な

現代語訳

其の一

(烏孫王は)玉帛を捧げ、朝廷から退出しても(天子の徳を慕って)帝都の空を望見している

(その)烏孫王は故郷へ帰ってからは、もはや(みずからを)王と称さない

空の果てまで静かなところには、戦もなくなり

戦乱の気は消え失せて、(かわりに天子の徳が)日月の光となった

其の二

北の海からの風は大地をどよもして吹き寄せ

(伝説の美女)王昭君の祠からは、白龍堆の大砂漠が望まれる

(そこかしこに見える)髑髏はすべて(かつて)長城の(建設に駆り出された)兵士たち

(それは)暮れゆく砂漠に、飛び散って灰となるのだ

解答

問1 A || キ B || エ

問2 3 || ウ 4 || オ

問3 C || イ D || カ

問4 I || オ II b || ク c || ア III エ

問5 己れが(5行目)

問6 イ・オ

出典：甲Ⅱ吉田兼好『徒然草』〈第三八段〉・乙Ⅱ『論語』〈十卷本第九卷 陽貨第十七〉 / 早稲田大学 政治経済学部・98年

甲

現代語訳

御随身の近友の自慢として、書き残している故実がある。(とはいえ読んでみると) 全て馬術(のことばかりで)、別にどうということもないことばかりである。(というわけで、まあ) その前例のことを考えて、(私にも) 自慢のことが(いくつ)かある。

現在の(後醍醐)帝がまだ皇太子でおいであそばしたころ、までのこうじどの万里小路殿(という御殿)が東宮御所であったのだが、(その御所内の)堀川大納言さまが出仕していらつしやった執務室に、用事があって(私が)参上したところ、(大納言さまは)『論語』の第四・五・六の巻をあれこれ広げておいでになって、「たった今、東宮さまにおかせられては、『中間色である)紫が(正色である)赤を圧倒する(ような印象を与える)ことが気にいらぬ』という文言(の原典)を御覧になる御希望があって、御本をお読みになるのだが、見つけることがおできにならないのだ。(そこで私に)『もっと念入りに探してみてください』との仰せがあったので、(こうして)探しているのだ(が、私も見つけられずに困っているところなのだよ)」とおっしゃるので、(私が)「(その文句なら)第九巻のどこそこのあたりにございますが」と申し上げたところ、「いやあ、助かった」とおっしゃって、(東宮さまのところ)にその巻を(持)っていってお渡し申し上げなされたのであった。

この程度の(人が度忘れたのをたまたま私が覚えていたような)ことは、子供たちも(よくやるような)ありふれたことではあるが、昔の人は、ちょっとしたことについても、ひどく自慢しているものである。後鳥羽院が御製(をお詠みになるときに)「袖と袂と(いう)似たような二つの言葉(を)、一首の中に(詠み込んで)いけないものだろうか」と、(新古今集撰者のひとり)で当時の歌道の権威であった)定家卿にお尋ねあそばした(ときに)、(定家卿がすぐさま)「(古歌にも)『秋の野の……穂に花の出た薄は、秋の野の草の《袂》なのだろうか。(だから)穂に花が出て(いる)様子が)恋しさをあらわにして(人を)招く《袖》のように見えるのであろう』と(古今集の在原棟梁の先例が)ございますから、何の支障がございませうや(、いっこう構いませんまい)」と申し上げたことも、(定家卿御自身が)「(御下問があったときに)状況に応じて典拠となる歌をよく承知していた。(和歌の)道での神の御加護でもあり、素

晴らしい好運でもある」などと、大げさに書き残しておられるのでございます。九条相国伊通公の昇進申請の願書にも、たいしたことのない項目まで書き載せて、(御自分の功績を) 自賛なさってある。

人が大勢同行して、(比叡山の東塔・西塔・横川の三箇所をめぐる) 三塔巡礼ということ(をしたこと) がございましたが、(そのときに) 横川の常行堂の中に、竜筆院りゅうひつゐんと書いてある古い額があった。「(ともに三蹟に数えられる) 佐理・行成の(二人の) うち(どちらの筆かについて) 疑問があつて、まだ決着がついていないと言ひ伝えております」と、堂(に奉仕する修行) 僧がもつたいぶつて申しましたので、(私が) 「行成(の書いたもの) ならば、裏書きがあるに違ひない。佐理ならば、裏書きはないはずだ」と言つたところ、(実際に見てみると、その額の) 裏は塵が積もり、虫の巣に(なつてい) て汚らしかつたのを、きれいに掃き拭つて、皆で見ますと、行成の官位・姓名・年号がはつきり見えましたので、その場の一同は大いにおもしろがつた(ことでした)。

(釈迦入滅の日である陰暦) 二月十五日の明月の夜、夜が更けてから、千本釈迦堂(の涅槃会) に参詣し、(庶民の集まる) 後ろ(の座のほう) から入つて、ひとり顔かほを深く隠して(説教を) 聴聞しておりましたところ、優雅な女性で、姿や香りが他の人とは違つて素晴らしい(人) が、(人々の間を) かき分けて入つてきて(私の) 膝に寄りかかると、(その人が着物に焚き込めた香の) 香りなども(我が身に) 移るほど(にしなだれかかってくる) だったので、これは厄介だと思つて、(膝を) ずらして脇にどくと、それでもやはり(私に) にじり寄つて、(前と) 同じ様子(で私を誘惑しよう) なので、(私はその場を) 立ち去つた。その後、ある御所方に仕える古參の女房が、とりとめもない話をされた(その) ついでに、「どうしようもなく無料な方でいらつしゃつたものだと、(あなたに) 幻滅申し上げたことがあつたのですよ。つれないと(言つて) あなたをお恨み申し上げる人がいるのです」と、打ち明け話をなさつたのだが、(私は) 「まったくもつて、なんのことかさっぱり身に覚えのないことですが」と申し上げて、そのままになつてしまつた。

このこと(について)、後で聞きましたところでは、例の(千本の寺の) 聴聞の夜、(前の方のある高貴な方の) お席の中からその方が(私を) おみつけになつて、お付きの女房を美しく化粧させて(お席から) お出しになつて、「(もし) うまくいいたら、(あそこの兼好に) 声を掛けるのだぞ。そのときの様子を、(ここへ) 帰つてから報告しなさい。おもしろかろう」と(おっしゃつ) て、(私をからかおうと) お仕組みになつたことだつたそう。

乙

書き下し文

〔論語〕子曰はく、「紫の朱を奪ふを悪むなり、鄭声の雅楽を乱るを悪むなり、利口の邦家を覆へす者を悪む」。

〔注釈〕朱は五正色の一なり。紫は則ち間色なり。楽は雅を以て正と為す。鄭声は則ち慢にして煩はし。利口は能く弁じて、以て是非善悪を顛倒すべし。

現代語訳

〔論語〕先生がおっしゃるには、「まじりけのある）紫が（純粹な）赤を圧倒する（ような印象を与える）のは気にいらぬ。鄭の（国のみだらな）音楽が（権威ある周王朝の）優雅な音楽を乱すのは我慢できない。口の達者な者で（その本末転倒な口先のために）国家を転覆させるような者は許せない。つまり、なにごとくも下品で目立つものが上品でおだやかなものを圧倒するのは困ったことだ」と。

〔注釈〕赤は五つの純粹な色のひとつである。（これに対して）紫はとりもなおさず中間色である。（また）音楽は（周王朝の伝統である）雅楽を正統とする。（これに対して）鄭の（国の）音楽はつまり淫らでうるさい。（また）口の達者な者は口先で人をまるめこむことができ、それによって是非善悪をひっくりかえすことができる。

解答

問1 A II

D II

問2 口

問3 申したりしかば

問4 ホ

問5 口

問6 興（22行目）

問7 ホ

問8 がくは雅をもつて正となす

問9 憎悪（または「好悪」など）

問10 ハ

問1 一般に、読解問題における空欄補充は、「前後の文脈を手がかりにして解く」「文章の構造に注意して解く」のどちらかで解けることが多い。ここでも、Aでは後者を、Dでは前者を用いて解答を導いていこう。

A ここでは第三段落にある「昔の人はいささかの事をも、いみじく自讃したるなり」に注目したい。「近友」が書き留めておいた自讃も、所詮「昔の人はいささかの事をも、いみじく自讃したるなり」とまとめられるものでしかない。とすれば、空欄には「たいたはたはたはた」というマイナスの評価が入るはずだということが見えてくる。この点から選択肢を眺めると、「させることなき事どもなり」とあるイが最適ということになる。

D ここで注目したいのは、空欄が定家に対する後鳥羽院の問いになっている点である。この点にさえ気が付けば、定家の答えから逆に質問の内容を推定することが可能である。ここで定家が答えているのは、「秋の野の〜」という歌を挙げて、こういう歌もあるのだから何の問題もありません、ということである。とすれば、後鳥羽院の質問は、ホ「袖と袂と、一首のうち悪しかりなんや」と考えるのが素直である。

問2 古文を読解する上での基本的な語句の知識を問う設問。ポイントは「当代」「坊」の理解だが、どちらも基本的なものである（間違えた諸君には猛省を促しておきたい。「当代」とは「現在の天皇」、「坊」は多義語だがこの文脈では「東宮坊（春宮坊）」の略で「東宮・皇太子」（文字通りには、東宮の御座所）の意である。したがって、正解は口となる。

問3 空欄の担うべき意味が「申し上げたところ」になるだろう、というのは語群と文脈を照らし合わせれば難なく理解できるだろう。あとはこの「申し上げたところ」という意味になるように、「申す・ば・たり・き」を並べ替えればよい。それほど困ることもなからうが、語順について「たり」と「き」の順番で戸惑った諸君がいたのではなからうか。しかし、安心されたい。「たり」は連用形接続だが（右に挙げた意味から《断定》にはなりようがない）、「き」には連用形がない。ということは、「たり・き」の語順でしか両者は結び付かないということである。それゆえ、「申したりしかば」として正解とする。

なお、「き」の活用形で迷った諸君に対して。確かに「き」には未然形「せ」が存在する（ということになっている）が、そもそも「未然形+ば」の表す《仮定条件》（当然未来の内容を表す）と「き」の表す《過去》が並存し得るわけがない。それゆえ、「こ

の『き』は未然形にするのかな」と考えるだけ野暮というもの。「せば」という形が出てくるのは、「せばまし」という《反実仮想》の構文のみであると覚えておきたい。

#### 問4 文学史の知識を問う設問。

イ『明月記』は、漢文体による藤原定家の日記。ロ『新古今和歌集』は、言うまでもなく、第八番目の勅撰和歌集。定家はその選者の一人でもあり、また代表的な新古今歌人でもある。ハ『小倉百人一首』も、定家の選。定家自身の歌「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」も収められている。ニ『三夕の歌』とは、秋の夕暮を詠んだ新古今所収の西行・寂連・定家の三首の和歌をいう。ホ『新撰髓脳』は、藤原公任の歌論書。したがって、ホが正解。

なお藤原定家には、歌集に『拾遺愚草』、歌論書に『近代秀歌』『毎月抄』などがあり、『松浦宮物語』の作者にも擬せられている。また、彼の父は『千載和歌集』の選者である藤原俊成である。

問5 直前に「佐理・行成のあひだ疑ひありて」とあるのがヒントとなる。佐理と行成のうちのどちらであるかに疑問がある、という内容を受けて傍線部の「まだ決定していない」に続くので、当然「佐理と行成のどちらか」ということがまだ決定していないというのである。では、何に対して「佐理と行成のどちらか」が決定していないのだろうか。これはさらに直前の「竜華院と書ける古き額あり」がヒントになる。つまり、「竜華院と書ける古き額」を書いたのが「佐理と行成のどちらか」ということが、まだ決定していないのである。

右の点を押さえられれば、答えはロに決まる。ちなみに、藤原佐理・藤原行成は小野道風とともに「三蹟」と呼ばれた平安時代の能書家である。

問6 やや難。これも自讃の例だと押さえることがまずは大切。問5で見たように、人々は竜華院と書いてある古い額を書いたのが佐理なのか行成なのかについてわからないでいた。と、そこへやってきた兼好が、裏書のあるなしで佐理か行成かを決定することができる」と指摘し、漸くこの問題は決着を見たのである。

このことを受けて「人皆 **G** に入る」と書かれているのだから、これが自讃になるためには、「人々はみな感心した」とか

「人々はみなおもしろがった」といった内容にならない。そこで、「感心する・おもしろがる」という意味になるような「〜に入る」という表現を考えつつ、相応しい漢字一字を本文中から探すことになる。そして、最後の「興あらん」の「興」を抜き出して答えとする。

**問7** この段落の内容が押さえられれば容易に解けるのだが、ここでは少し別の視点から解説しておこう。まず押さえておきたいのは、「人あまたともなひて」と始まる前段落から、作者の自讃譚になっている点である（丁寧語「侍り」の出現などに注意）。逆に言えば、もう傍線部Hの段落にイ「堀川大納言殿」・ハ「九条相国伊通公」・ニ「後鳥羽院」は登場しないのである。とすれば、この段階でイ・ハ・ニははずすことができる。

残るは口とホだが、この言葉が「古き女房〓優なる女」の作者に向けてのものであること及び「奉る」という謙譲語が用いられていることからすれば、自動的にホに答えは決まってくる。

**問8** ポイントは「以X為Y」である。これは漢文における基本構文の一つ。「XをもつてYとなす」と読み、「XをYと思う・XをYにする」などの意味を表す。例えば、「以汝為宰相」なら「あなたを宰相にする」、「以汝為怯」なら「あなたを臆病だと思う」という具合である。なお、前後の文脈から「X」が省略された場合「以為」を「おもへらく」と読む場合があることも知っておきたい。

この設問は右の点さえわかれば容易。「かくは雅をもつて正となす」が正解である。

**問9** 「ム」という送り仮名があるので、これが「にくむ」と読まれ「嫌う」の意味で用いられていることはすぐにわかるだろう。あとは、「嫌う」の意の「悪」を含む二字の熟語を思い出せばよい。「憎悪・好悪・嫌悪」などの中から一つ選んで答えとする。

なお「悪」の字は、「嫌う」の意に用いるときは「オ」と読み、「悪い」の意に用いるときは「アク」と読む。

**問10** 「注釈」の最後の一文「利口能弁、可以顛倒是非善悪矣」に注目する（というより、ここしか注目するところはない）。ポイントは「能弁」「可以顛倒是非善悪」の二つである。選択肢の中でこの二つを含んでいるのは、ハしかない。したがって、これが正解。

イ・ロには後者についての指摘がなく、ニ・ホには前者についての言及がない。

出典：西村茂樹『西語十二解』／明治大学・法学部・93年

## 文章略解

権利とは、イギリスのライトという語の訳語で「法にかないたる言ひ分」の意味である。そして権利は義務と互いに関係をなすものであるから、一人に権利があれば、相手にはそれに応じて義務が生じることになる。この権利とは、八つに細分することができる。自然の権利・付け加えたる権利・他に渡すべき権利・他に渡すべからざる権利・十分の権利・十分ならざる権利・各個の権利・総体の権利の八つである。

## 解答

問1 身体・生命・財産

問2 大気と水と光

問3 (イ)

問4 (オ)

問5 財産

問6 (ア・ウ)

問7 (イ)

問8 ① ㊦ゆえん

② ㊦嘱

③ ㊦天賜

④ ㊦草卒(倉卒)

⑤ ㊦侵奪

⑥ ㊦強

⑦ ㊦せよ

⑧ ㊦せま

⑨ ㊦ばくち

⑩ ㊦とゆう

## 解説

問1 「自然の権利」について説明されているのは14～15行目。「他に渡すべきの権利」について説明されているのは26～28行目。「自分の権利」について説明されているのは35行目の「人間の生命身体財産の権利」の部分のみ。これらの三者に共通する漢字二字の語を三つ抜き出すというのがこの設問の要求である。「十分の権利」の部分に登場する「生命」「身体」「財産」の三つを素直に答えておけばいい。「自然の権利」の部分に「財産」という語は登場しないが、傍線(c)の「己れが労作をもって造りたる者」がこの

言い換えになっている(↓問5)。「他に渡すべきの権利」の部分に「身体」という語は登場しないが、25行目の「造物者より受け得たる智力」云々の表現が(これは16行目の「天より活動したる体を受け」に相当している)これを踏まえたものと読み取れる。また、「自然の権利」「他に渡すべきの権利」の双方に「自由」という語が登場するが、これは「十分の権利」の部分に該当する記述がなく、設問の指示にある「もの」というほどの具体性もないので、解答としては不適切。

問2 「地上の植物と動物の肉」は設問の語句では「総体の権利」の例、となっているが、49行目には「人類全体の上に属する所の権利」という中間項が置かれている。これはさらに54行目で「人民総体の公用に属する所の物」と言い換えられている。この「人民総体の公用に属する所の物」の具体例で、六字のものを探していけばいい。

「公用」の類似表現はなかなか求めにくいですが、「共同に用うる」(15行目)に気がつけばそこから導ける。まずは設問を見て、類似表現の見当をつけてから問題文にあたっていくのがここでは得策。

問3 「能幹」という語は問題文中ではここにしか登場しない。したがってこの部分だけで「能幹」なる語の意味の見当をつけ、一方選択肢群のそれぞれの「幹」の意味の中でどれがそれに相当するかを見ていかななくてはならないのだ。そもそもこの部分の文脈では「法律」とは違う意味合いであることしか分からない。

そして「能幹」という語はあまり見慣れないものだ。したがって辞書的な意味の把握も困難である。ここではまず選択肢を見ていくのが得策だ。(ア)・(ウ)・(オ)の「幹」がそれぞれ「中心的な」の意味であることは想像がつく。そして(イ)と(エ)は「仕事をする」に関するもの、ということになるうか。それぞれを詳しく見ていくと、(イ)の「材幹」は「仕事をする才能を持つ人」である。「人材」とか「逸材」とかいう語を想起すれば「材」に「才能を持つ人」の意味があることの想像はつくだろう。ということは、「幹」の字の方に「仕事」の意味が含まれていることになる。ここまで考えてくれば、「材」＝「才能」で、どうも「能幹」に近そうだという推測ができよう。実際「能幹」とは「すぐれたはたらき」の意味なのだ。というわけで正解は(イ)。

一方(エ)の「幹事」に関しては、「仕事をたくさんする人」の意味である。ただ、この「幹事」については「仕事」の意味を持つ「事」があるので、「幹」はむしろ別の意味を持っていると考えるべき。実際、「幹事」の「幹」は「善」の意味で、「任に堪えて仕事を善くする」の意である。詳しくは漢和辞典で「幹」の字を引いてみる。

問4 傍線部分が「もし他人より損害さるるときは」という仮定を受けてのものであることを押さえ、これの類似表現を問題文中に求めていけばいい。「他人から損害される」ということが述べられているのは、「もし他人これらの物を損害シシダツする時は……」(35行目)以下の部分。ここにちゃんと「法律の裁判によりてその者を罪に行ない」とある。これは「十分の権利」について述べた部分である。

問5 これに関しては問1参照。傍線(c)が「生命と身体と自由」という先天的なものに並置される形で述べられていることから、「後天的に獲得したもの」であることがわかるはず。

問6 「暇」はここでは「いとま」と訓む。「いとま」と訓むのは「余裕」の意味合いで名詞として用いられているときである。選択肢(i)のように「時間的余裕がある状態」の意味合いで用いられ、形容動詞の語幹になっているときは通常「ひま」と訓む。

問7 設問の指示には「趣旨」とあるが、実質的には内容を見比べていくだけで解答は導ける。(ア)は8行目以下の記述を踏まえたものと思われるが、義務に対して「それを止める権利」がある、とは記されていないので誤り。「望をシヨクすべからざるの権利」と「止める権利」とは違う。(イ)は最終段落(55行目以下)の「已むことを得ざるの権利」の具体例として適切である。問題文の末尾の「必ずその損失を償わざるべからざる」に対応する部分もある。(ウ)は前半部分が「恩を施したる者は、恩を受けたる者よりその報を受くべきの権利あり」(43～44行目)と矛盾している。また「悪政」云々についての言及も問題文中にない。(エ)は「時に已むを得ない」の記述を問題文中の最終段落と照らしてみても「公法を曲げる」ということまでは書かれていないので誤り。

問8 漢字の読み書きの問題であるが、見慣れぬ言葉が多かったことだろう。③は「天資」とも考えられるが、「資質」というような抽象的なものではなく、具体的な「体」を指しているのだから、「天からの賜りもの」と取った方がベター。原文もこれである。④は、「時間がない様子」の意味。